

松本市宮泷本村遺跡Ⅲ

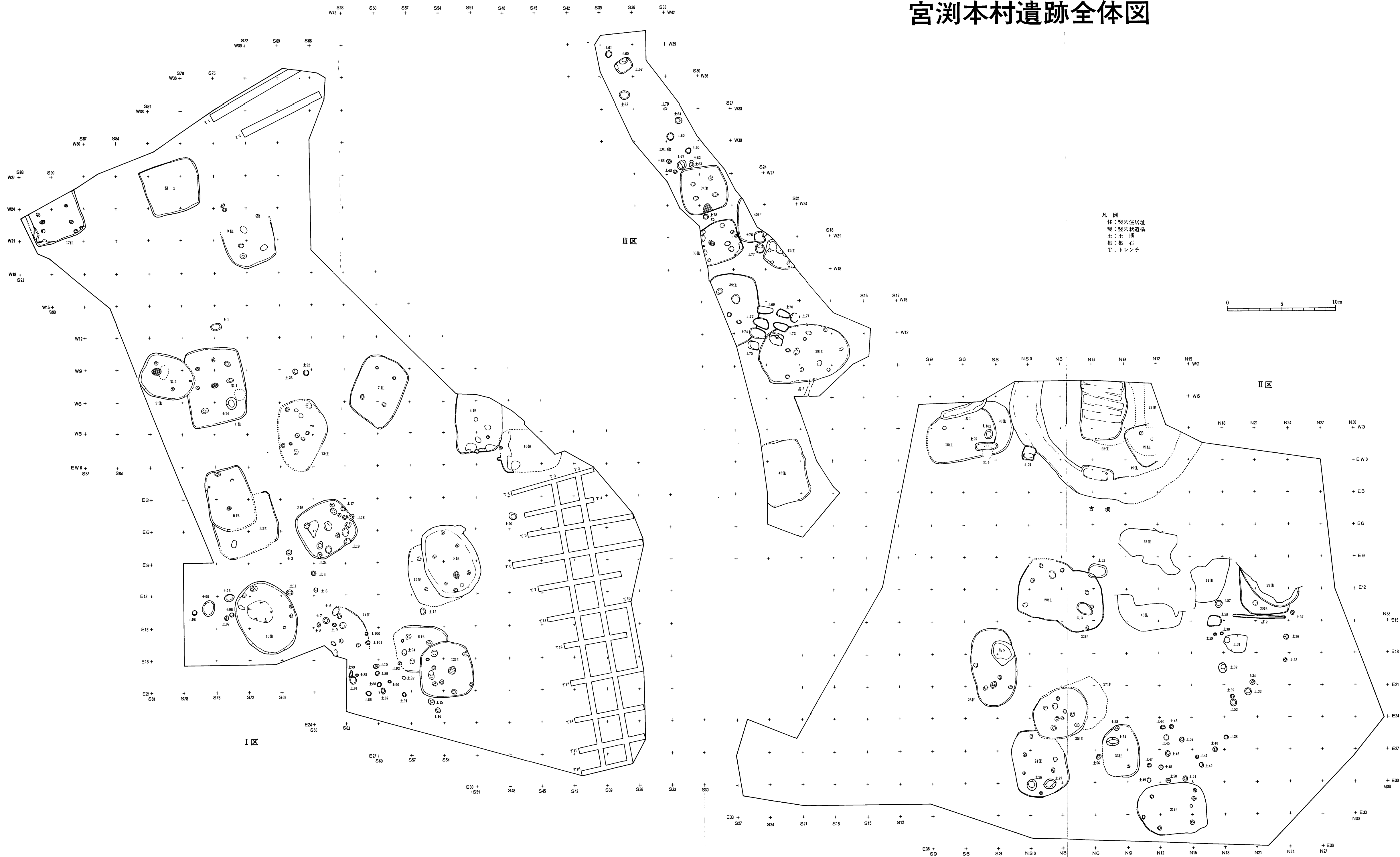
——緊急発掘調査報告書——

(遺構編)

1989. 3

松本市教育委員会

宮渕本村遺跡全体図



松本市宮泷本村遺跡Ⅲ

——緊急発掘調査報告書——

(遺構編)

1989. 3

松本市教育委員会



調査地全景 遠方は松本市街



第70号住居址遺物出土状態



同上部分

序

宮渕本村遺跡は古くより弥生時代の遺物を出土している場所として知られており、特に塩尻市柴宮で完形の銅鐸が発見されるまでは、信州で唯一の銅鐸片を出土した遺跡であり、考古学者の注目の地でもありました。

この地は昭和45年、水道局による配水管敷設工事に際し、藤沢宗平先生らによって発掘調査され、弥生時代の集石を検出しておりますが、それに接して、今回下水道処理場の拡張工事が行われることとなり、下水道部と連繫をとりながら発掘調査を行いました。

調査は7月から10月までの約3ヶ月間にわたり、多くの方々のご協力により完了できました。その結果、弥生時代住居址24軒、古墳時代住居址1軒、土壌21基など数多くの遺構を検出し、また夥しい土器の出土をみました。本書はそれらのうち、遺構のみをまとめました。遺物については前回、前々回をあわせて全体として後日報告書としてまとめたいと思っております。

本調査は酷暑の時期もあり、調査員、作業員の方々には大変ご苦勞をいただきました。記して感謝申し上げます。また周辺町会の方々にも何かとご迷惑をおかけいたしました。これまた文化財保護にご協力いただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

本書が歴史解明に少しでもお役に立てば幸いです。

平成元年3月

松本市教育委員会 中島 俊彦
教 育 長

例 言

1. 本書は昭和63年7月20日から10月12日にかけて実施した松本市宮淵本村に所在する宮淵本村遺跡の第3次の緊急発掘調査に関する報告書である。
2. 本調査は松本市公共下水道事業宮淵浄化センター拡張工事に伴うもので、松本市教育委員会が行ったものである。
3. 今回は前2回同様「遺構編」とし、発見された遺構についてのみ報告し、遺物については前2回の発掘調査のものとともに別の機会に報告する。遺構図についても遺物出土状態図、遺物出土状態部分図は同様に扱う。
4. 本書の執筆は、第1章：事務局，第2章2節1：山田真一・直井雅尚，その他を直井雅尚が担当した。
5. 本書の編集は事務局が行った。
6. 土壙出土人骨の取り上げについては、西沢寿晃氏（信州大学医学部第2解剖学教室）の御指導，御教示を受けた。記して感謝する。
7. 本調査に関する現場測量図類，写真類，作業日誌類，その他事務関連書類および出土遺物類は松本市教育委員会，松本市立考古博物館が保管している。

目 次

第1章 調査経過	
第1節 調査に至る経過	3
第2節 調査体制	3
第2章 調査結果	
第1節 調査の概要	5
第2節 遺構	
1. 住居址	
第67号住居址	8
第68号住居址	8
第69号住居址	8
第70号住居址	9
第71号住居址	9
第72号住居址	9
第73号住居址	10
第74号住居址	10
第75号住居址	10
第76号住居址	11
第77号住居址	11
第78号住居址	11
第79号住居址	12
第80号住居址	12
第81号住居址	12
第82号住居址	13
第83号住居址	13
第84号住居址	13
第85号住居址	13
第86号住居址	14
第87号住居址	14
第89号住居址	15
第91号住居址	15
第92号住居址	15
第93号住居址	15
2. 竪穴状遺構	16
3. 土壇	16
4. 溝址	17
第3章 調査のまとめ	43

挿 図 目 次

第1図	調査地の位置	4	第15図	第80・84号住居址	29
第2図	調査地の範囲	6	第16図	第81号住居址	30
第3図	遺構全体図	7	第17図	第82号住居址	31
第4図	第67・69号住居址	18	第18図	第83号住居址	32
第5図	第68号住居址	19	第19図	第85号住居址	33
第6図	第70号住居址	20	第20図	第86号住居址	34
第7図	第71号住居址	21	第21図	第87号住居址	35
第8図	第72号住居址	22	第22図	第89号住居址	36
第9図	第73・78号住居址	23	第23図	第91・93号住居址	37
第10図	第74号住居址	24	第24図	第92号住居址・竪穴状遺構	38
第11図	第75号住居址	25	第25図	土壌(1)	39
第12図	第76号住居址	26	第26図	土壌(2)	40
第13図	第77号住居址	27	第27図	溝址1	41
第14図	第79号住居址	28	第28図	溝址2	42

図 版 目 次

第1図版	調査地全景	第12図版	住居址(11)
第2図版	住居址(1)	第13図版	住居址(12)
第3図版	住居址(2)	第14図版	住居址(13), 溝址
第4図版	住居址(3)	第15図版	土壌(1)
第5図版	住居址(4)	第16図版	土壌(2)
第6図版	住居址(5)	第17図版	土壌(3)
第7図版	住居址(6)	第18図版	埋甕炉(1)
第8図版	住居址(7)	第19図版	埋甕炉(2)
第9図版	住居址(8)	第20図版	調査スナップ(1)
第10図版	住居址(9)	第21図版	調査スナップ(2)
第11図版	住居址(10)		

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

宮淵本村遺跡は、松本市宮淵本村に所在し、従来、宮淵遺跡あるいは宮淵二ツ塚遺跡として、縄文時代から平安時代にかけての遺物が出土することで知られてきた。また銅鐸の鈕の一部を出土したことで古くから注目されていたところであった。

ところがこの遺跡の北部一帯に松本市が松本市公共下水道事業宮淵浄化センター拡張（汚泥処理施設）工事を行うことになったため、当該地内の遺跡が破壊されるおそれが生じた。そこで関係部局で遺跡の保護についての協議を重ねた結果、第1回目の緊急発掘調査が行われたのが、昭和60年度である。引き続き翌年度には第2次調査として前年の未調査部分を対象とし、今回はその東側一帯の地区の調査を実施することとなった。

第2節 調査体制

調査団長：中島俊彦（教育長）

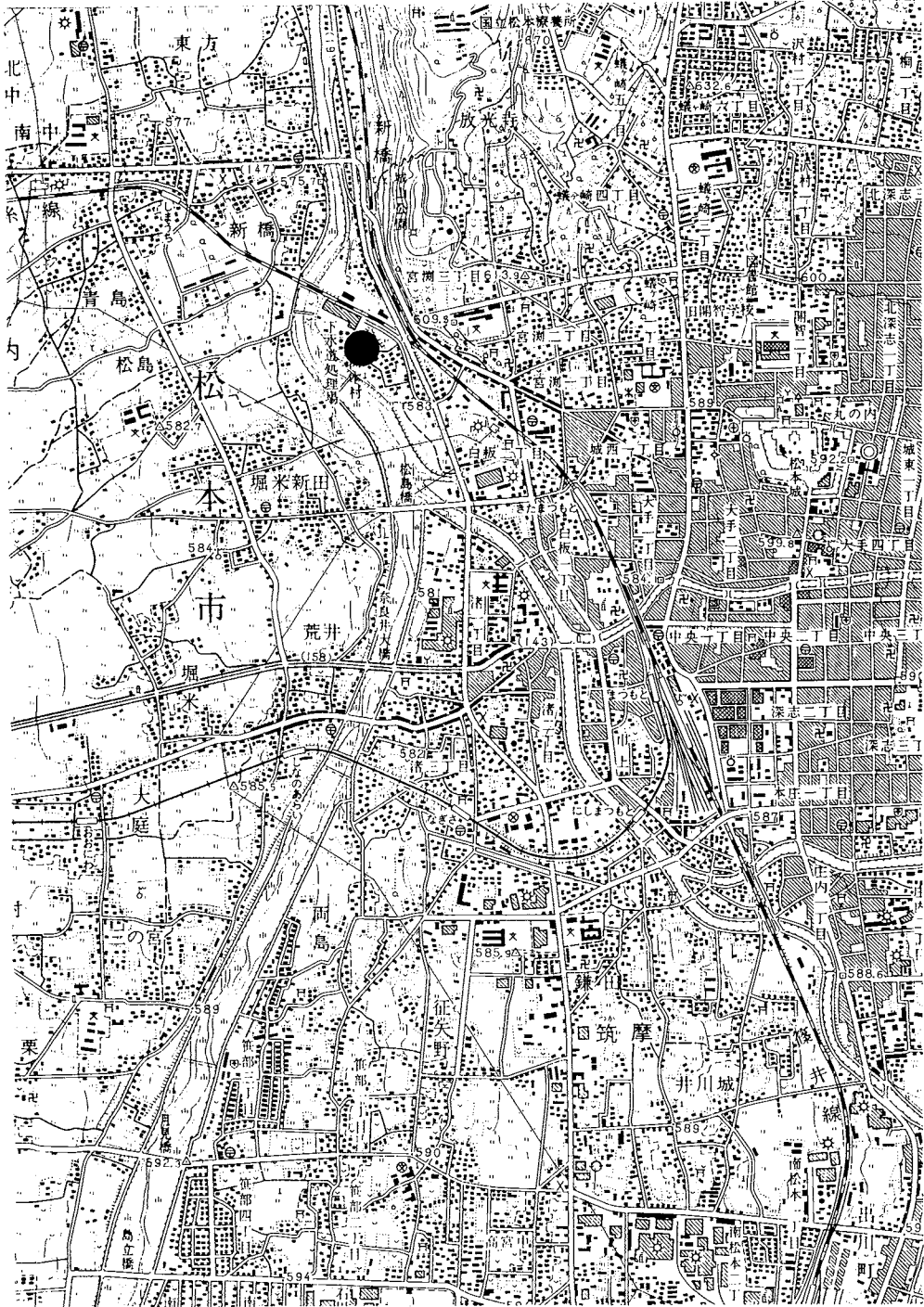
担当者：神沢昌二郎（考古博物館長）

現場主任：直井雅尚（社会教育課主事）

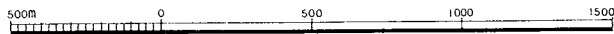
調査員：西沢寿晃，土橋久子

協力者：青木雅志，赤羽章，赤羽包子，石井良子，石川末四郎，伊豆原理恵，伊丹早苗，犬飼充彦，若井七十郎，江南創太，大出六郎，大蔵直味，大澤真二，太田千尋，大谷成嘉，大塚袈裟六，大沼健一郎，岡部登喜子，尾崎友季，小野光信，金子富人，川上とよみ，川上春子，北沢達二，桑原利枝，小池直人，小林謙次，小林文子，小松正子，五味総一郎，酒井文雄，佐々木恵里子，下里みつ江，瀬川長広，袖山勝美，曾根原令子，田上一郎，武井緑，武居由美子，多田邦彦，塚原晴美，鶴川登，土井麻希子，中島新嗣，中島督朗，中村恵子，南雲美紀，巾崎助治，林昭雄，藤本嘉平，藤本利子，洞沢武子，丸山久司，丸山誠，丸山よし子，南山久子，見村芳子，宮沢利男，宮島俊行，麦島安夫，村山正人，百瀬きゑ，百瀬弘子，百瀬二三子，百瀬義友，矢島利保，山口専礼，行武瑞恵，横山篤美

事務局：萩原博（下水道部次長），高橋秀次（下水道課長補佐），千野満稔（同主査），浅輪幸市（社会教育課長），田口勝（文化係長），熊谷康治（同主査），降旗英明（同主事），山岸清治（同事務員）



1 : 25,000



第1図 調査地の位置

第2章 調査結果

第1節 調査の概要

今回は、松本市公共下水道宮淵浄化センター拡張に伴う一連の発掘調査の3次調査にあたる。昭和60・61年度に行われた1・2次調査地の東側、約3,000㎡の畑地・旧宅地を対象として実施した。ただし旧宅地の庭木の移動の済んでいない部分約240㎡は調査が不可能だったため除外した。発掘調査は通例と同様、重機によって表土・耕作土を除去した後、人力で遺構検出作業を行い、確認できた遺構は順次命名して掘り下げを行った。これに平行して前2回同様に調査地を3×3mの方眼で覆い、遺構のオフセット測量を進めた。遺構の名称・番号等は基本的に前2回のを踏襲・継続したが、土壌については301から番号を付した。実質の調査面積は最終的に2,270㎡となり、1～3次調査の総計は、8,485㎡に及ぶ。当遺跡が載る宮淵本村の台地を幅約80mのトレンチが横切ったことになり、遺跡の様々な面を露呈した。

調査内容では、前2回の調査同様、弥生時代を主体とする多数の遺構とそれらに伴う多量の遺物が発見された。遺構の種類は、竪穴住居址、土壇、溝址、竪穴状遺構がある。竪穴住居址（以下、単に「住居址」）は今回新たに25軒が発見され、前2回の調査からの通し番号が第93号住居址に達した。ただし今回の調査地区は以前に宅地になっており、耕作土層が非常に浅い上に攪乱が激しくほとんどの住居址が壁高数cmという無惨な状態で、中にはまったく削平されてピットと炉址のみのものや、壁の大半を失うものもあった。このため遺構検出作業には非常に難渋し、住居址番号を付して作業を進めたが、最終的に住居址にならなかったところもある。しかしこれらを除いて再度住居址番号を振り直すことは、後日の整理作業での混乱がより大きいと考え空番のままとした。第88・90号住居址の2軒分が相当する。これにより1次調査からの空番住居址は、第23・49・88・90号住居址の4軒分となった。住居址の時期は第69号住居址1軒が古墳後期である他は、すべて弥生時代のものである。土壇は21基が発見されたが、良好な状態での遺物の出土がなく、時期を確定できるものが少ない。平面形は円・楕円の不整なもの、かなり長い楕円形の2種があり、前者の性格は不明だが、後者については墓壇と断定できるものがあり、その他も同様と考えられる。溝、竪穴状遺構については性格は不明。遺物は、住居址を中心に多量の弥生土器・石器や、若干の土師器が出土した。石器には打製・磨製の石鏃、磨製石斧、石包丁、石鋤等が見られる。遺物等の出土状態で特筆されるのは、第70号住居址（弥生時代後期前半）の壺・台付甕・甕および土製紡錘車の一括出土、土壇301・302・304・321の人骨と礫・炭化物の出土、土壇303・311の礫の集中投入、等である。



第2図 調査地の範囲



第3図 遺構全体図

第2節 遺構

1. 住居址

第67号住居址（第4図，図版2）

調査区北部の、半島状に飛び出す未調査地の北側に位置する。第68号住居址を切り、南東部1/3程が未調査地に隠れる。プランはやや不整な隅丸の長方形を呈すと推定され、規模は、東西が約5.0m、南北は現況で4.4mを測る。主軸方向は炉址の位置からN-8°-Wまたはそのまったく逆を指すと推定する。壁は5~8cmを残すのみで、立ち上がりの傾斜もなだらかである。床は平坦だが極めて軟弱で、耕作等の影響のためか、各所に攪乱が入る。炉址は中央部南寄りの調査区域外との境界にあり、壺の下半を埋設した埋壺炉だったと見られるが、炉体土器は耕作等の影響で、何片かに割れて原形をとどめなかった。ピットは6個あり、P₁・P₅・P₆は主柱穴に対応し、P₄も何らかの関連があるものと推定されるが、いずれも浅い。

遺物は検出面から多量に出土したが覆土下層になると少なくなる。土器からみて弥生時代中期末の住居址と考える。

第68号住居址（第5図，図版2）

調査区北部の、半島状に飛び出す未調査地の北西に位置する。第67号住居址に東部を切られ、南東部の一帯は未調査地にかかる。プランは隅丸の長方形を呈し、主軸はN-46°-Eを指す。規模は長軸が8.0m、短軸が推定で6.8mを測り、今回調査のなかでは最大級に属する。壁は5cm前後と浅い。床面は平坦だが堅さはまったく感じられず、各所に耕作や木の根による小規模な攪乱がある。第67号住居址との重複部分は、双方の住居址の床までの深さがほとんど同じであった。炉址は調査範囲内には見当たらない。ピットは9個発見され、P₁とP₇が主柱穴の一部にあたると思われる。ピットの他に南西部の壁に沿って、床より5~10cm低い長方形の落ち込みが付随している。

遺物は南西部のコーナーから土器が若干まとまって出土したが、他は覆土・床面とも非常に少ない。土器は弥生時代中期後半のものである。

第69号住居址（第4図，図版3）

調査区中央の西寄りにあり、第74号住居址の北西部を切っている。プランは3.4×3.2mの不整な隅丸方形を呈し、主軸はN-40°-Wを指す。壁は若干の傾斜を有し、高さは55~60cmを測る。今回調査の住居址のなかでは際立って深いものであった。このため本址の底面は当遺跡一帯の下部の基盤である砂礫層まで達していて、床はその砂礫層をそのまま用いており、貼床はまったく見られなかった。炉址はなく、カマドが北西の壁の中央部に設けられている。石芯カマドであつたらしく、

粘土等は失われていたが径10～30cmの礫が数個、残存していた。ピットは発見できない。

本址の中層から下層にかけては、大量の礫の投入がみられた。遺物はこの礫中の下層・カマド周辺から出土した。量は少ないが一括品の土器が出土した。土器からみて、古墳時代後期の住居址である。

第70号住居址（第6図，図版4）

調査区西端に位置する。第76号住居址を切り、北西隅は未調査地にかかる。プランは長軸8.0m、短軸5.6mの長方形を呈す大形の住居で、主軸方向はN-72°-Eを指す。壁は10～20cmあり、立ち上がりの傾斜はなだらかである。床面は平坦で、掘り方をそのまま用い砂礫質あるいは砂質となっている。ただし部分的に、弱粘質土と黄色砂の混じった土を貼った堅緻な面も確認できた。炉址は判然としないが、東側中央P₁・P₃の間にひろがる焼土が相当し、地床炉であったと思われる。ピットは13個発見された。このうち、P₁・P₃・P₅・P₆・P₇・P₁₂が対応し、主柱穴ととらえられる。覆土は5層に分かれ、自然堆積の状況を呈す。I層には炭化物・焼土の混入がみられた。

遺物はI層中および床上から炭化材が少量、また南壁と東部の床上から一括土器が多数出土している。土器からみて、弥生時代後期前半の住居址と考える。

第71号住居址（第7図，図版5）

調査区南西隅に位置する。第80・81号住居址を切り、南西隅は未調査地にかかる。プランは5.8×5.8mの隅丸方形を呈し、主軸はN-4°-Eを指す。壁は斜めに掘り込まれており、高さは20cmを測る。床面は地山の砂礫層をそのまま用いている。そのためやや凹凸があり、さらに中央にむかってゆるくくぼんでいる。また、北東隅から西壁・南西隅にかけて、幅20cm・深さ5cm程の周溝が確認された。炉址は中央やや北寄りに設けられている。地床炉で、その規模は36×30cmである。ピットは19個発見された。このうち、P₂・P₅・P₁₁・P₁₈が対応し主柱穴であったと考えられる。覆土は2層に分かれる。ともに小礫を多量に含んでいる。

遺物は上層・中層より弥生時代中期後半を主体とする土器が出土している。

第72号住居址（第8図，図版5）

調査区中央やや南東に位置し、第73号住居址を切る。プランは長軸5.0m、短軸4.0mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-55°-Wを指す。壁は高さ10cm程で、立ち上がりの傾斜はなだらかである。床面は地山の砂礫が露出し、凹凸が顕著であった。あるいは貼床をしていたと思われるものだが、その痕跡は発見されず不明である。なお、北西側の壁と東隅には幅10～20cm、深さ5cmの周溝が設けられている。炉址は発見されなかった。中央に位置するピットの中に相当するものがあるが、灰を僅かに含むだけで焼土は検出されず不明である。ピットは14個発見された。このうちP₁・P₃・

P₁₁・P₁₃が主柱穴と考えられる。また、P₅・P₇もあるいは補助柱穴として利用された可能性がある。覆土は2層に分かれ、自然堆積の様相を呈している。礫を多量に含んでおり、特に中央部には拳大のものが集中していた。

遺物は、中央部の礫中その他より大小片が多量に出土している。しかし、一括性の認められるものは少ない。本址の時期は、弥生時代中期後半と推定される。

第73号住居址（第9図，図版6）

調査区中央やや南東に位置し、第72号住居址に切られる。遺存状況が悪く、プラン・規模とも明らかでない。残存部は3.6 mあり、あるいは隅丸長方形を呈すものと考えられる。主軸方向はN-20°-Wを指している。壁は5 cmを残すのみで、立ち上がりの傾斜もなだらかである。床は掘り方をそのまま用いており、地山の砂礫が露出している。炉址は発見されなかった。5個発見されたピットのうち、北半にある大形のP₁を炉址と想定してみたのだが、焼土が検出されず不明である。覆土は削平により僅かしか残っていないが、褐色土の単層で礫を多量に含んでいる。

遺物は少量出土しているが、一括品と認められるものはなく、所属時期も不明である。

第74号住居址（第10図，図版6）

調査区中央やや南西に位置し、第69号住居址、土壌313・317に切られる。プランは長軸5.7 m短軸4.7 mの隅丸長方形を呈し、主軸はN-12°-Wを指す。壁は5～10 cmと浅く、若干の傾斜を有している。床面は地山の黄色砂質土・砂礫質土をそのまま用いている。特に中央では黄色砂質土をタタキ固めた良好な面が確認された。炉址等の施設は発見されなかったがピットは16個検出された。しかし、主柱穴に相当するものを明らかにすることはできなかった。覆土中には、径5～15 cmの垂円礫が中央部上層から床面にかけて集中してみられ、特に下部では径5 cm前後にそろっていた。

遺物は土器が礫中から、大破片を含み散発的に出土した。弥生時代中期末の住居址と考えられる。

第75号住居址（第11図，図版7）

調査区南部中央にあり、第87号住居址の北半分を貼っている。主軸方向はN-2°-W、規模・平面形は長軸6.8 m、短軸5.7 mの隅丸長方形を呈する。壁は下端部の緩い立ち上がりの部分が捉えられただけで、壁高は7～15 cmを測るのみである。床は、第87号住居址と重複しない部分は、砂礫質で凹凸が激しくあまり床らしくないものであったが、重複部分では固い面として把握することができず、一部を抜いてしまった。炉址に該当するような焼土・炭化物はまったく見当たらない。ピットは12個発見されたが、南部にある2個は第87号住居址の床面で検出されたため、ピット番号が本址のものではなくなっている。

本址覆土上層からは土器の中小破片が大量に出土したが、中下層では一転して少なく、一括品も

ほとんどなかった。ただし中央部に入為的とみられる礫の集中があった。土器からみて弥生時代後期の住居址であろう。

第76号住居址（第12図，図版7）

調査区南西部に位置し，第70号住居址に切られる。規模・平面形は南北が現状で4.8m，東西4.5m，主軸をN-80°-Wにとる隅丸長方形のプランと推定する。ただし第70号住居址に切られる付近の西辺はプランが崩れている可能性がある。壁は5～10cm程しか残存していなかった。床は炉址周辺に堅緻な部分があったほかは，地盤の黄色砂質土そのままの軟弱なものであった。炉址は中央部西寄りにあり，壺の胴部上半を逆位に埋め込んだ埋甕炉（土器炉）である。ピットは9個検出され，P₁・P₅・P₉が支柱穴と見られる。

遺物は，覆土が浅いにもかかわらず，土器の大形破片がいくつか出土した。土器は弥生時代中期後半のものである。

第77号住居址（第13図，図版8）

調査区南端部にあり，南西隅が僅かに調査区域外にかかる。主軸はN-81°-Eを指し，規模・平面形は5.0×3.3mの長方形を呈すが，南西部でやや形が乱れている。壁は5～20cmの高さで，やや傾斜を有する。床は暗黄褐色土の比較的平坦で堅緻なものである。炉址は中央部東側の床上にある焼土の広がりをもってあてる。ピットは11個検出できたが，柱穴に関連するものはP₂・P₃・P₆・P₁₀あるいはP₁₁が想定される。ただし本址西側の1/4程の範囲にはまったくピットがなく，南西部のプランが若干おかしいこと，同部の土層にも乱れがあることと重ね合わせて，もう少し東西方向が短かった可能性も否定できない。

覆土中より少量の土器が出土したのみである。土器は弥生時代中期後半のものがおおい。

第78号住居址（第9図，図版8）

調査区南部東寄りにあり，溝址2に切られ東部は島状に残る調査区域外地区に隠れる非常に不明瞭な住居址である。主軸方向がN-56°-Wくらいを指す，楕円形のプランをとると推定するが詳細はまったくわからない。壁は傾斜があり，10～20cmの高さを測る。床は地盤の礫の混じる黄褐色砂質土をそのまま用いてあまり堅さはなく，中央部に向かって徐々に深くなっているようである。住居に伴う施設は検出できなかった。

遺物は弥生中期後半以降の土器が出土しているが，時期が雑多で，整理作業を経ないと本址に本来から伴うものを抽出できない。

第79号住居址（第14図，図版9）

調査区中央部に位置し，土壌311に切られる。主軸方向N-7°-Wを指す，隅丸長方形のプランを呈するものと考えが，東と北側は攪乱により破壊されてははっきりしない。残存部分の壁は，高さが10cm前後を残すのみである。床は地盤の砂礫質の強い黄褐色砂質土をそのまま用いており，平坦で中央部は若干堅さが感じられる。本址の一带は攪乱が多く，床面以下まで破壊しているものは図示したとおりに把握したが，これら以外にも覆土中には大小多数の攪乱が入っていて，実際にはそれ以上に床面が削られている可能性は充分ある。そのためであろうか，ピット・炉址等の本址に伴う施設は一切発見できなかった。

攪乱部分や覆土が生きていた部分から弥生土器が多数出土したが，時期の決定は現状のところ不可能である。

第80号住居址（第15図，図版9）

調査区南部西寄りに位置し，第71号住居址に切られる。規模・平面形は，主軸がN-5°-Eを指す，4.3×3.4mの長方形を呈するものと推定される。全体的に削平が著しく，壁は5～10cm前後しか残存していない。地盤の砂利層をそのまま床としており，貼り床はまったく見られない。炉址は残存範囲では発見できなかった。ピットは4個検出されたが，いずれが柱穴に比定できるのか不明である。

本址の僅かな覆土中からは少量の弥生土器の破片が出土した。それらの土器から見ると，本址は弥生時代中期後半のものと考えられる。

第81号住居址（第16図，図版10）

調査区南西部に位置し，東側を第71号住居址に切られる。推定される規模・平面形は，短辺4.9m，長辺は5m以上を測る隅丸の長方形ないしは方形を呈し，主軸方向はN-96°-W，あるいはまったくその逆を指す。削平が激しく，壁の残存は5～10cm程度を測るのみである。床は炉址の周辺から西側にかけて黄色砂質土を貼って強く叩いてあるが，他は砂礫質の地盤をそのまま用いている。炉址は床面の中央部と見られる地点にある，土器（壺）の上半部を逆位に埋め込んだ埋甕炉である。ピットは12個検出されたが，P₂・P₆が主柱穴の一部になると推定される。

遺物は覆土中より土器の中小破片が大量に出土したが，一括品は少ない。石器では大型蛤刃石斧の完形品の出土がある。土器からみて弥生時代中期後半の住居址と考える。

第82号住居址（第17図，図版10）

調査区南東部に位置する。東半分を攪乱により破壊され，南部は削平により失われている。規模・平面形は，長径5.0m以上，短径4.8m以上の楕円形を呈し，N-28°-W方向に主軸をとるものと推定されるがはっきりしない。残存している壁は3～10cmの壁高を測る。床は地盤の砂礫が剥き出しになっており起伏が激しく，床面らしきを感じられない。ピットは8個が確認されたが，規模と配列が揃わず，主柱穴の比定は難しい。

遺物は弥生土器の中小破片で，残っている覆土が少なかったため出土量も少ない。時期は弥生時代中期末を考えているが，整理作業が進めば若干の前後があるかもしれない。

第83号住居址（第18図，図版11）

調査区南西隅に位置し，第91号住居址を切る。規模・平面形は5.6×4.9mの楕円形あるいは南北の辺が張る隅丸の長方形を呈し，主軸はN-17°-Eを指す。今回調査の住居址のなかでは珍しく全形のわかるものであった。壁は各辺とも10～15cmの高さを残している。床は地盤の変化に準じて南西部1/3が黄色砂質土，他が砂礫質土で貼り床はまったく見られず，軟弱なものであった。炉址の存在は確認できない。ピット数は34個という実に多数の発見があった。また南東部には周溝らしきものもある。これらから本址は当初P₁・P₂・P₆・P₂₇を主柱穴とし南東部に残る周溝を伴う一回り小さい住居で，その後P₁・P₂・P₆・P₃あるいはP₂・P₂₃・P₃₄・P₁₈を主柱穴とするものに拡張されたのではないかと考える。

遺物は，弥生土器の中小破片が偏りなく全域から出土したほか，北西覆土から管玉が得られている。土器からみて弥生時代中期末の住居址と推定される。

第84号住居址（第15図，図版11）

調査区南西隅に位置する。ほんの一部が調査区域内に顔を出しているにすぎない。プランは主軸N-11°-Eの長方形を呈すと推定されるが非常に不確実である。壁は25cmの高さを残し，今回調査の住居址のなかでは深い方であった。床は，住居址端部のためか，地盤をそのまま用いて軟弱なものである。ピット・炉址は調査範囲内には見当たらない。

遺物は多数の弥生土器の破片が出土した他に，完形に近い鉢や，磨製の石包丁が2点ある。調査範囲が狭いわりに遺物が多い住居址で，そのごく一部しか調査ができないのが誠に残念であった。出土土器からみて，本址の時期は弥生時代後期に位置付けられる。

第85号住居址（第19図，図版12）

調査区北部にあり，西部を第86号住居址に切られ，北部は調査区域外に隠れる。全体的に削平が激しく，壁は3～10cmを残すだけであり，ラインに不自然な部分があるので，本来の壁ではないと

ころを壁として捉えてしまっている可能性も否定できない。プランは一応、主軸N-88°-Eをとる楕円形と考えたが前述のようであり、確実さに欠ける。床は砂礫と砂利層の地盤そのものでまったく床らしくない。炉址は奥壁寄りのピット間にあり、土器を埋設した埋甕炉である。ピットは11個検出されたが、住居址全体のプランの不確かさから支柱穴の比定ができない。繰り返し言うが、本址は壁のライン、炉址の位置、ピットの配置のいずれからみても、このままの姿が本来のものであったとは考えられない。

遺物は弥生土器の中小破片が多量に出土した。また床面中央部南には置き砥石の完形品もあった。本址の時期は出土土器からみて弥生時代中期後半から末にかけてと考える。

第86号住居址（第20図，図版12）

調査区北部に位置し、第68・85号住居址を切り、北部は調査区域外に隠れる。主軸方向N-35°-Eを指し、長径4.8m以上、短径3.8mの楕円形プランを呈する。壁の残存は極めて悪く、壁高が10cmに達するところはなく、まったく失われてしまった部分もある。床は地盤をそのまま用いているが、全体的に平坦で若干の堅さがある。炉址は床面中央部やや北寄りで見られる位置にあり、土器（壺の胴部下半）を埋め込んだ埋甕炉である。周辺に若干の焼土を残している。ピットは小規模なものが6個と、大きく浅いものが1個検出された。支柱穴はP₁とP₃あるいはP₄（P₂も加えたほうが良いかもしれない）がその一部を担うものであろう。

遺物は弥生土器の小破片が多量に出土した。また南端部の床面からは扁平片刃磨製石斧が出土したが、上向きの面は被熱してやや赤く変色していた。本址の時期は出土土器や炉体土器からみて弥生時代中期後半であろう。

第87号住居址（第21図，図版13）

調査区南部中央に位置し、北側半分を第75号住居址に貼られている。プランはN-101°-Eに主軸をとる、隅丸の長方形を呈す。今回調査のなかでは全形の判明する数少ない住居址の一つである。壁は比較的残りが良く、壁高15~30cmを測る。床は礫質の地盤をそのまま用いており、貼り床はないがかなり堅緻なものであった。炉址は検出できない。ピットは18個あり、P₂・P₆・P₁₀・P₁₄が方形配列で支柱穴に相当すると見る。本址にはその他の施設として周溝がある。幅10~20cm、深さ5cm前後のものが、北壁下から東壁下にかけてと、南壁下から西壁下にかけて巡っている。

遺物は弥生土器の小中破片が全域から出土したが、特に西壁中央部の直下の一带に土器片が多数散乱していた。本址の時期は出土土器の概略から見ると、弥生時代中期末と考えられるが、土器の整理が進むと若干の変更があるかもしれない。

第89号住居址（第22図，図版13）

調査区中央部北寄りに位置する。本址一帯は攪乱が著しく，中央部を大きな攪乱で破壊されて，南北に分断されている。また外周のラインも部分的に破壊されて乱れているところがあり，図示したものが本址の本来の姿ではない可能性がある。基本的なプランは4.8×4.9m以上の隅丸長方形になると考えるが，北西部の張り出しはかなり不自然で，あるいは本址と重複する別遺構の可能性があるが，調査中にはその確証はつかめなかった。床は砂礫質の地盤そのもので，起伏に富んでいる。炉址に相当するものは発見できなかった。ピットは16個あるが柱穴の比定は困難である。

遺物は弥生土器の中小破片が多量に出土し，特に南東隅からは一括品に近いものも得られた。しかし攪乱中に混じった土器片等も多く，現段階では時期を決めかねる。

第91号住居址（第23図）

調査区南東隅部に位置し，第83号住居址に切られる。東側は調査区域外に大きくかかり，規模・平面形の推定は不可能である。壁は20cm前後を測る。床は黄色砂質土の地盤そのまま，非常に軟弱である。ピット・炉址の検出は調査範囲内ではない。

遺物は弥生土器の小破片が少量出土しただけである。本址の時期は現状では弥生時代であることしかわからない。

第92号住居址（第24図，図版14）

調査区北西部に位置し，西側は調査区域外にかかる。本址一帯は以前の耕作等による削平が著しく，表土を5cmも剥ぐとすぐ遺構検出面に至るため，本址の壁は3～10cm残存しているのみである。主軸N-31°-Wの楕円形プランを呈すと推定するが，規模はわからない。床面は非常に軟弱で，ほとんどの部分に細かい攪乱がはいっている。炉址に相当するものは調査範囲内では見当たらない。ピットは2個検出できただけで，柱穴は不明である。

遺物は弥生土器の大小破片が少量出土した。一括品が若干ある。時期は弥生時代中期後半とみられる。

第93号住居址（第23図，図版19）

調査区中央東部にある。壁および床面を削られて失い，炉址とピットのみを検出した。住居址の平面形・規模はまったくわからないが，主軸方向はN-117°-Eを指す。炉址は奥壁寄りと推定されるピット間にあり，土器（壺）の胴部上半を逆位に埋設している。ピットはこの一帯に9個あり，P₁・P₂・P₃・P₅・P₆・P₈の6個が長方形配列で主柱穴になるとみたい。

遺物はピット内から弥生土器の破片が少量出土したのみである。本址の時期は炉址の位置と，炉体土器から弥生時代後期と考える。

2 竪穴状遺構（第24図）

調査区西端部の中央に位置する。南北方向3.7m，東西方向は西側が調査区域外にかかって不明だが，現況で2.5mを測る。平面形は長方形になるものと予測する。壁は高さが2～5cmと，非常に微弱なものである。床面（底面）はまったく軟弱な黄色砂質土そのもので，しかも一様に底面が現れるのではなく，漸移的に地盤の土になっていくといった状態であった。本址に伴う施設はまったくない。

遺物は弥生土器の小破片がごく少量出土したにすぎない。時期は現段階では弥生時代以降のものとしかいいえない。

3 土壙（第25・26図，図版15～17）

総数21基（土壙301～321）が発見されている。平面形は，楕円あるいは隅丸の長方形を呈すものと，円形，不整形がある。円形，不整形のものには壁の立ち上がりははっきりせず，攪乱，あるいは抜根の跡の可能性もあり，性格の特定ができないものがほとんどであった。一方，楕円あるいは隅丸の長方形を呈すもの（土壙301～304・310・311・318～321）は，墓址の可能性が指摘できるものばかりで，中には人骨が出土して明らかに墓であるものもいくつかあった。以下では，この墓址の可能性のあるもの，墓であるものに焦点を絞って触れてみたい。

墓址あるいは墓址の可能性のある土壙のなかにも，主軸のとり方と覆土の状態で3つの類型がある。第1の類型は主軸が東西方向を指すもので，土壙303・311の2基が相当する。平面形は隅丸長方形。覆土の上層から下層までの全面に，径5～15cm大の礫が人為的に投入（「詰め込んだ」という表現のほうが適切か）してあるのが特徴で，いずれも底面にはその他の礫とは明らかに区別がつく形で，長軸の2/3程の位置に直交するように枕状の礫が1個，横たえてある。人骨の出土はないが墓址である可能性が高いと考える。遺物は弥生土器の小破片が多量に出土したが，意図的に入れられたものは土壙303の礫群の直上から出土した弥生土器の壺の口頸部の一括品1点のみである。これによって本類型の土壙が弥生時代中期後半から末にかけてのものであることはほぼ間違いないであろう。

第2の類型は主軸がきっちりと南北を指すもので，平面形は隅丸長方形を呈す。土壙310・318の2基が該当する。覆土中には礫は多数混じるが，礫径が揃いで位置的にも人為的に入れられた状況ではない。遺物は弥生土器の小破片が覆土から多数出土したがすべて混入品である。時期は，土壙318の覆土中層から古墳時代後期の土器（鉢）の一括品が出土し，本類型の土壙がその時期に属するものであることが判明した。今回調査の第69号住居址や，前2回の同期住居址に伴うものであろう。人骨等の出土はなく，墓址であることを積極的に証明できないが，その可能性は高いと考える。

第3の類型は主軸を南北から僅かに西に振るもので，土壙301・302・304・319・320・321の6基が該

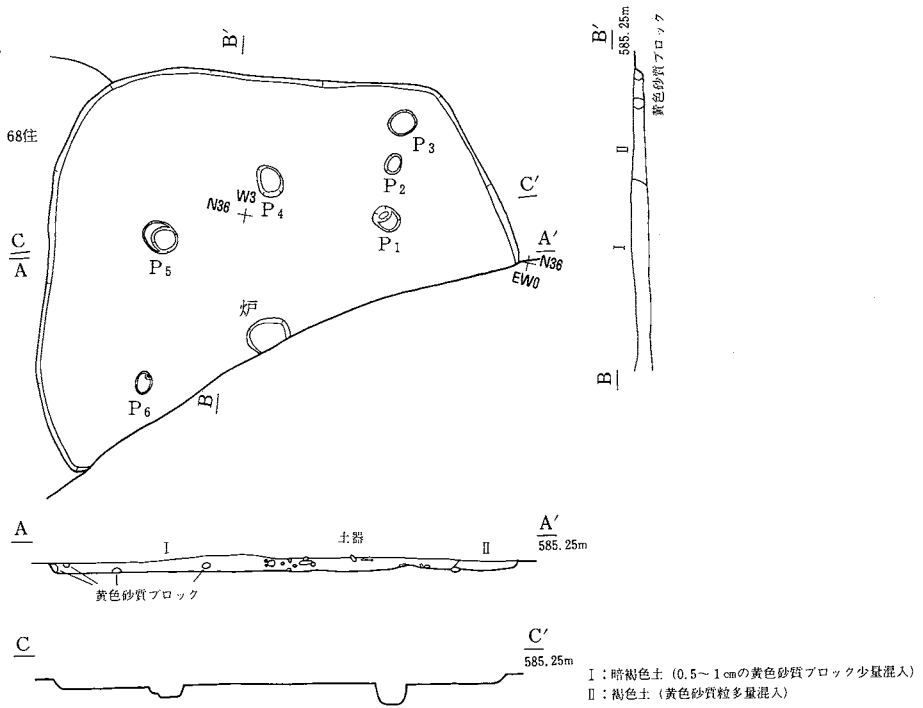
当する。削平を受けてかなり浅くなっているものもある。土壙 321 は溝址 1 と重複していたため当初から発見できず、溝址 1 の掘り下げ中に気付いて、急遽土壙として取り扱ったため壁をほとんど失ってしまった。本類型の土壙の特徴は、土壙底面に径 2～3 cm の円礫が敷き詰めるように集められていたこと、その直上から数 cm に亘って人骨が出土したこと、さらに残存の良い土壙では人骨の上には径 20 cm 大の礫が集めてあり、しかもその礫はいずれもその場で熱を受けたらしく割れていたこと、等が列挙できる。人骨の出土からみて明らかに墓であり、しかもかなり変わった埋葬の仕方に見える。人骨が遺存できたのは焼骨化していたためだが、人骨は一般の火葬に付された状態とも異なっていた。本類型の土壙における埋葬状態を推定すると次の様になるうか。まず土壙底に小礫を敷き、その上に遺体を載せる（遺体が完全な形であったかどうか、何らかの変形があったかどうか、複数であったかどうかは、現段階では触れられない）。次に土で埋めると共に遺体の上部に径 20 cm 大の礫を集めて置き、さらに土で礫が隠れる程度に埋め、その上面で火を焚く。これによって遺体上の礫は熱を受けて割れ、遺骨も熱を受ける。というように、特殊な経過のため人骨も焼骨化して残存したのだと考えるが、その一方、地上で焚いた火がこのように地中まで強い影響を与えるのかどうか疑問ものこる。本類型の土壙の時期については、意図的に入れられたと認められる土器やその他の遺物がなく不明である。混入品としては多数の弥生土器の小破片があるが、それをもって本類型の時期とするのは現段階では無理がある。第 2 の類型の例もあることから、弥生時代中期後半から古墳時代後期のどこかに属するものとしておく。

尚、本書は「遺構編」ということで各遺構とも掘り上げの最終形を図に提示してある。そのため特に土壙からの人骨や礫の出土状態の図がなく、単に記述だけで触れるといったわかりにくい形になっているが、いずれ刊行される「遺物編」に、人骨についての細かい所見とともにそれらの図類も掲載する予定であるので、今回はお許し願いたい。

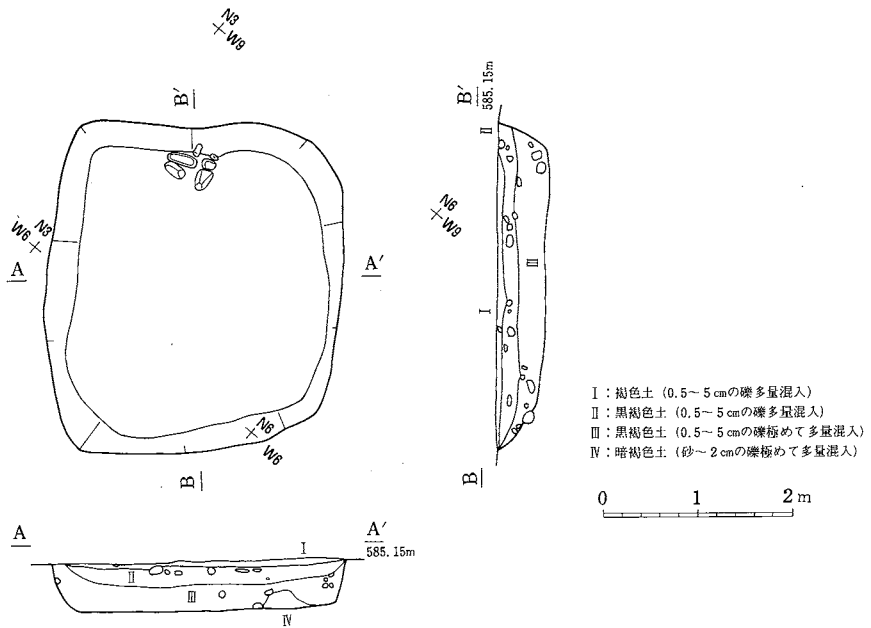
4 溝址（第 27・28 図，図版 14）

調査区東端を北北西から南南東にむかって走る溝址 1 と、調査区南部で東西方向に延びる溝址 2 の 2 本がある。溝址 1 は深さが 10～20 cm を測る浅いもので、このため各所で削平のため途切れて断続的なもののような観を呈しているが、本来は一続きのものだったであろう。遺物は弥生土器の破片が少量あっただけで、時期の特定はできない。ただし土壙 321 に切られていたようだ。溝址 2 は幅 1.5～2 m、深さ 20～60 cm を測る規模の大きいもので、第 78 号住居址を切っており、東側は調査地区外にかかっている。当初は住居址として捉えていたが、あまりに細長く、底部もガラガラと下降しているため溝址に変更した。多数の弥生土器の中小破片を出土しており、弥生時代に属するものであることは確かであろう。

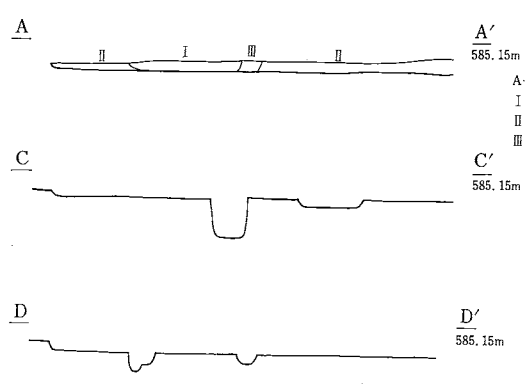
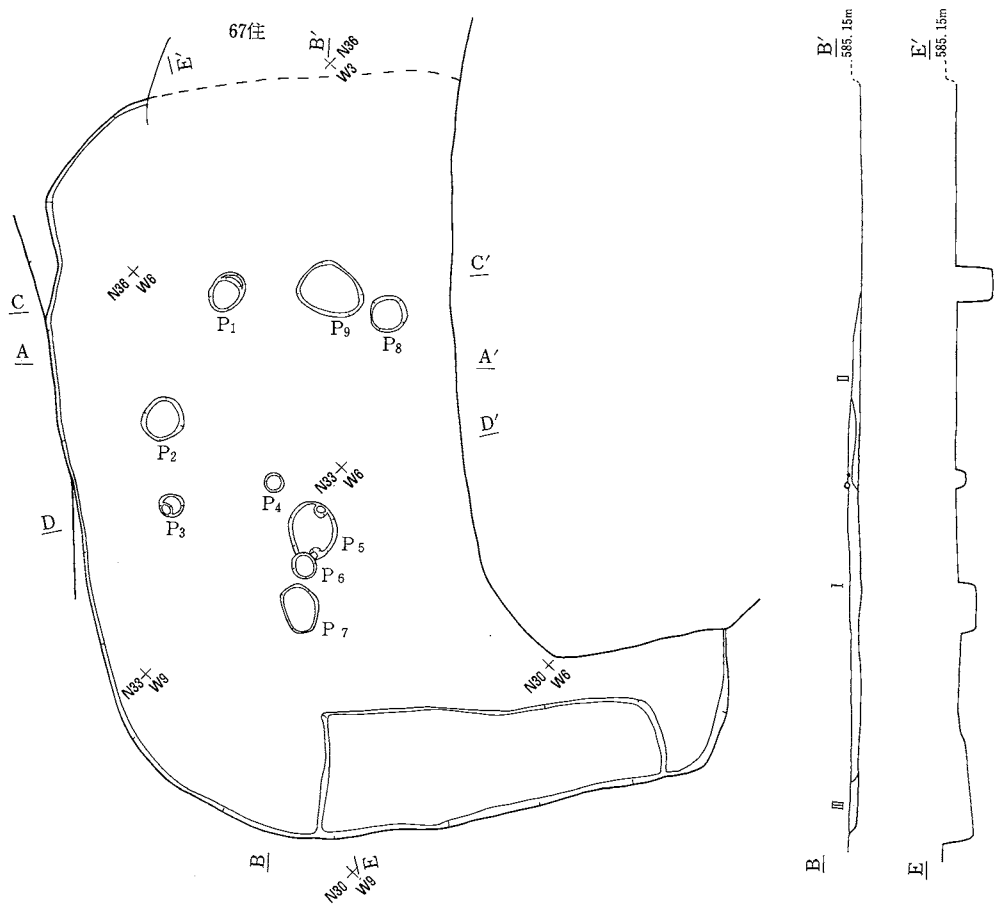
第67号住居址



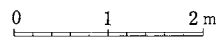
第69号住居址



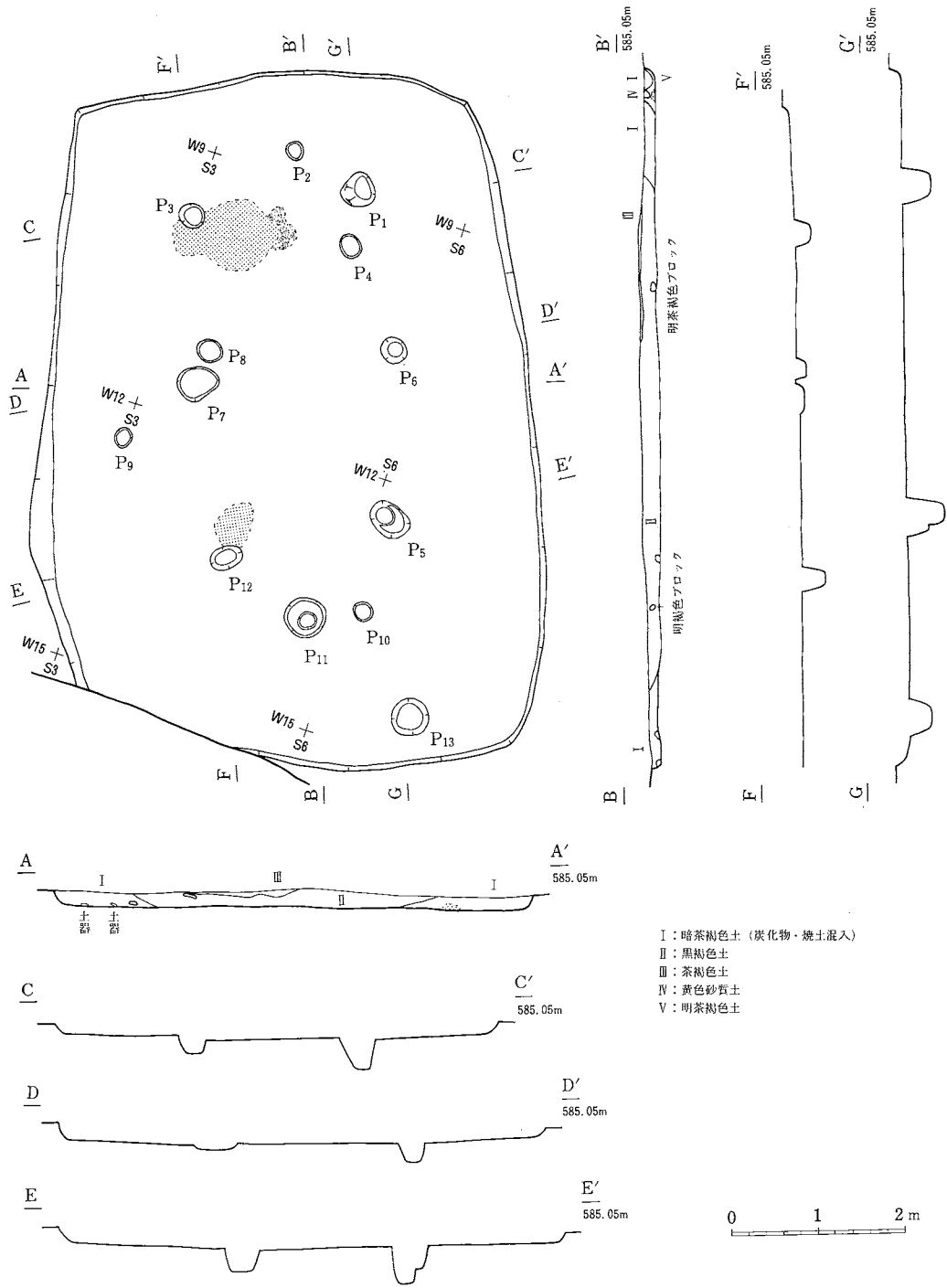
第4図 第67・69号住居址



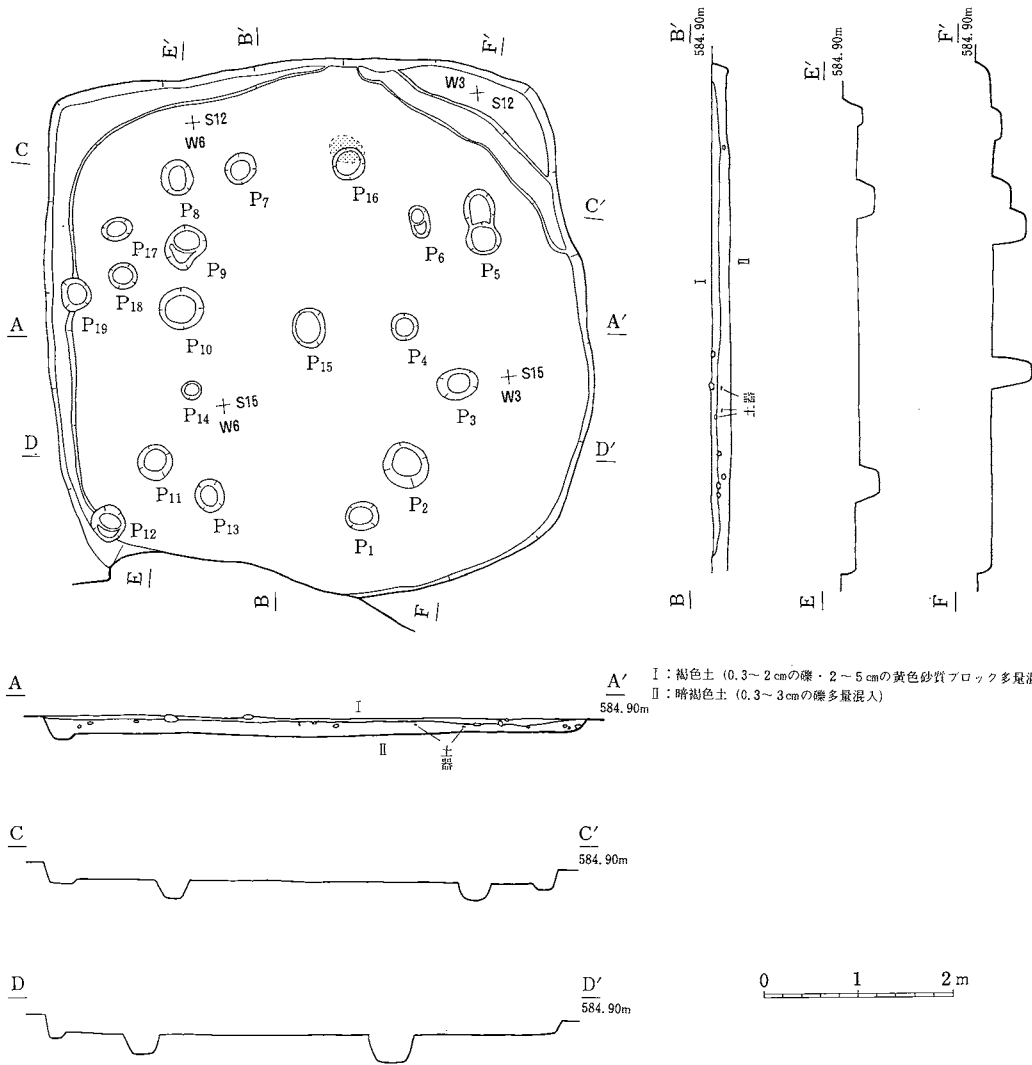
- | | |
|--------------------|------------------------------|
| A-A' | B-B' |
| I: 褐色土 (黄色砂質粒多量混入) | I: 褐色土 (1~5cmの黄色砂質ブロック多量混入) |
| II: 黄色砂質土 | II: 黄色砂質土 (1~5cmの褐色土ブロック中混入) |
| III: 暗褐色土 (根による攪乱) | III: 褐色土 (黄色砂質粒多量混入) |



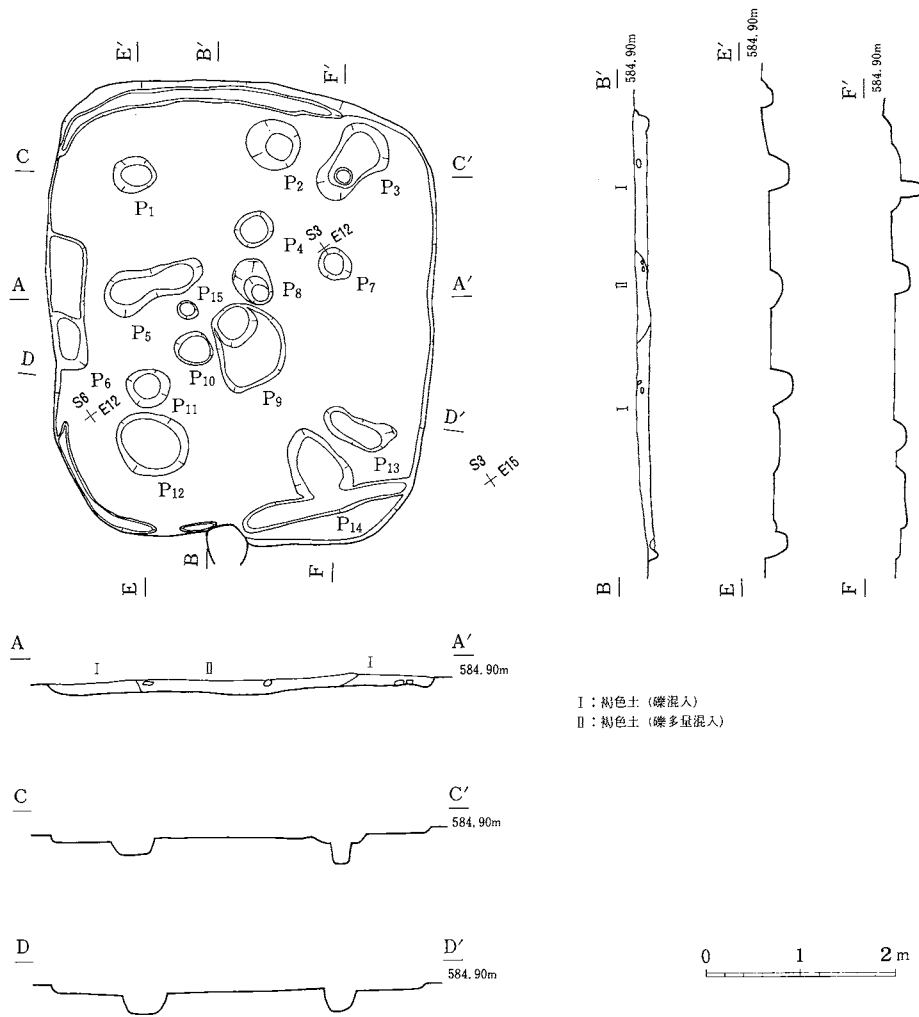
第5図 第68号住居址



第 6 図 第70号住居址

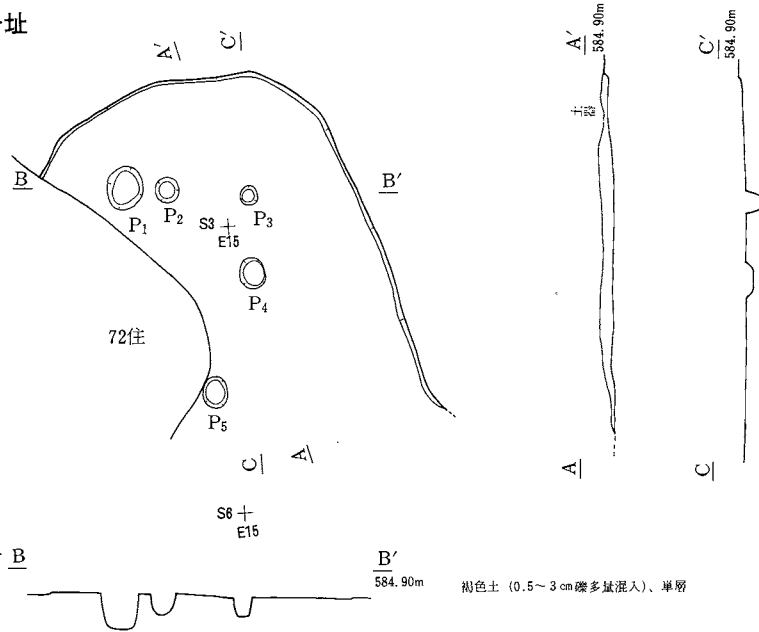


第7図 第71号住居址

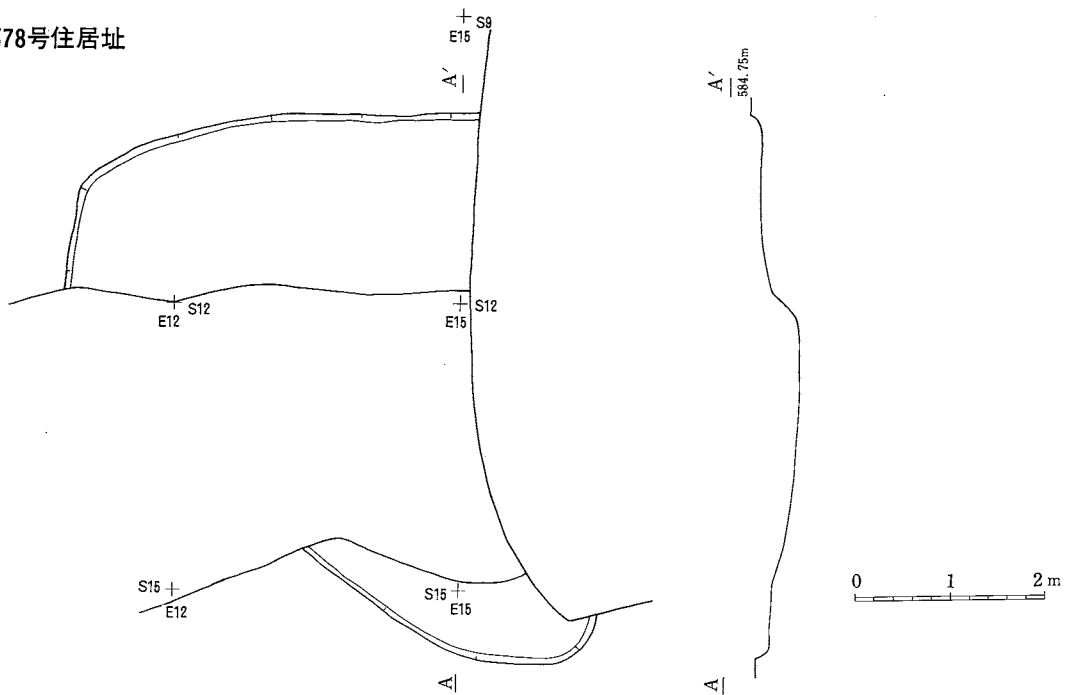


第 8 图 第72号住居址

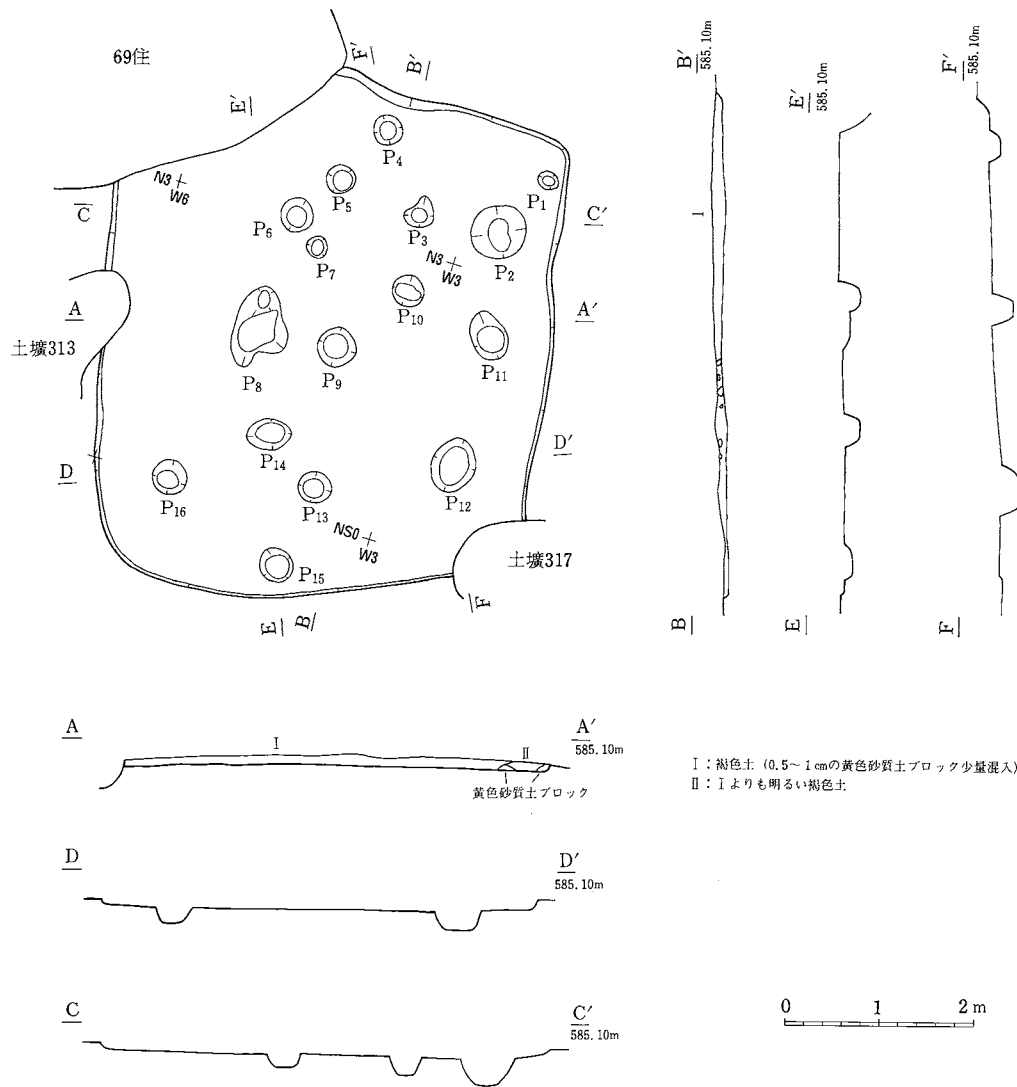
第73号住居址



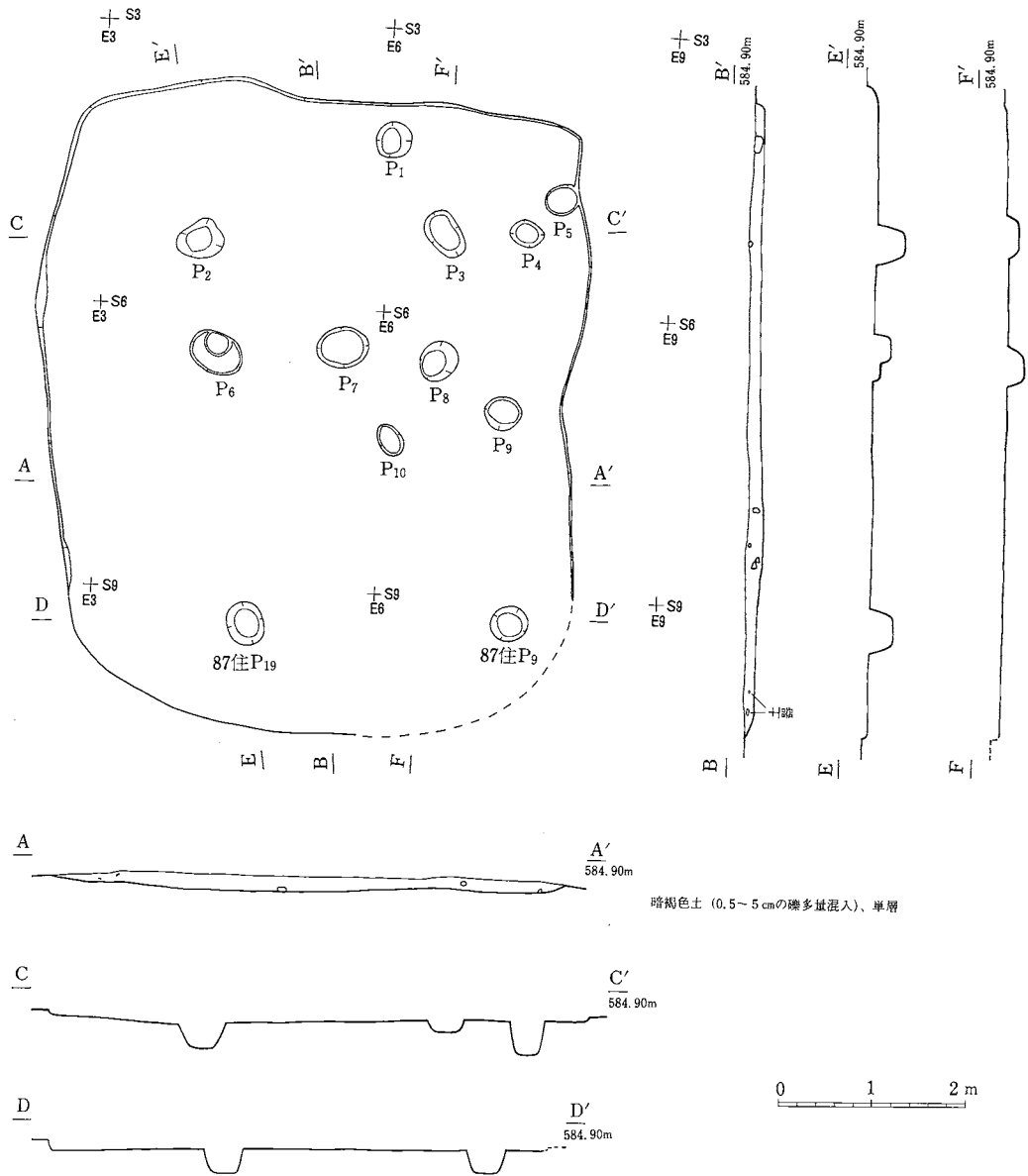
第78号住居址



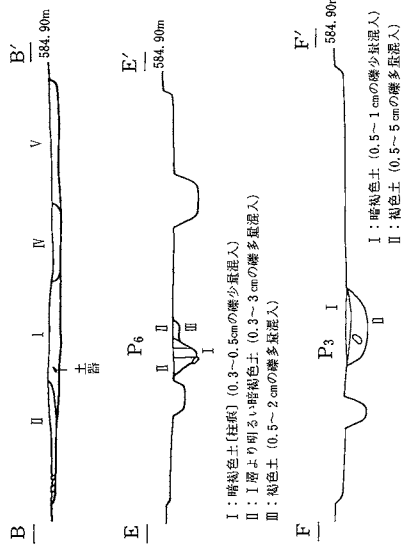
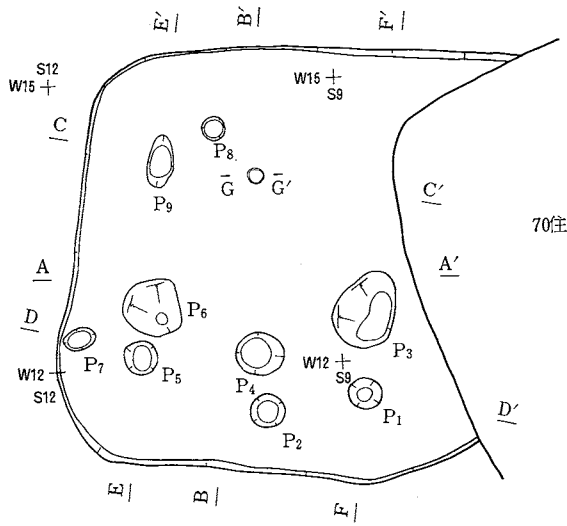
第9图 第73・78号住居址



第10図 第74号住居址

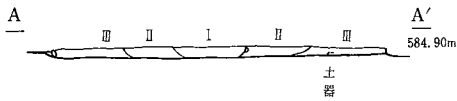


第11図 第75号住居址

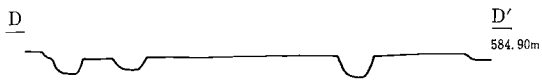
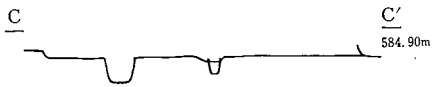
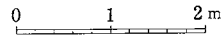


I : 暗褐色土 (注釈) (0.3~0.5cmの礫少量混入)
 II : I層より明るい暗褐色土 (0.3~3cmの礫多量混入)
 III : 褐色土 (0.5~2cmの礫少量混入)

I : 暗褐色土 (0.5~1cmの礫少量混入)
 II : 褐色土 (0.5~5cmの礫多量混入)



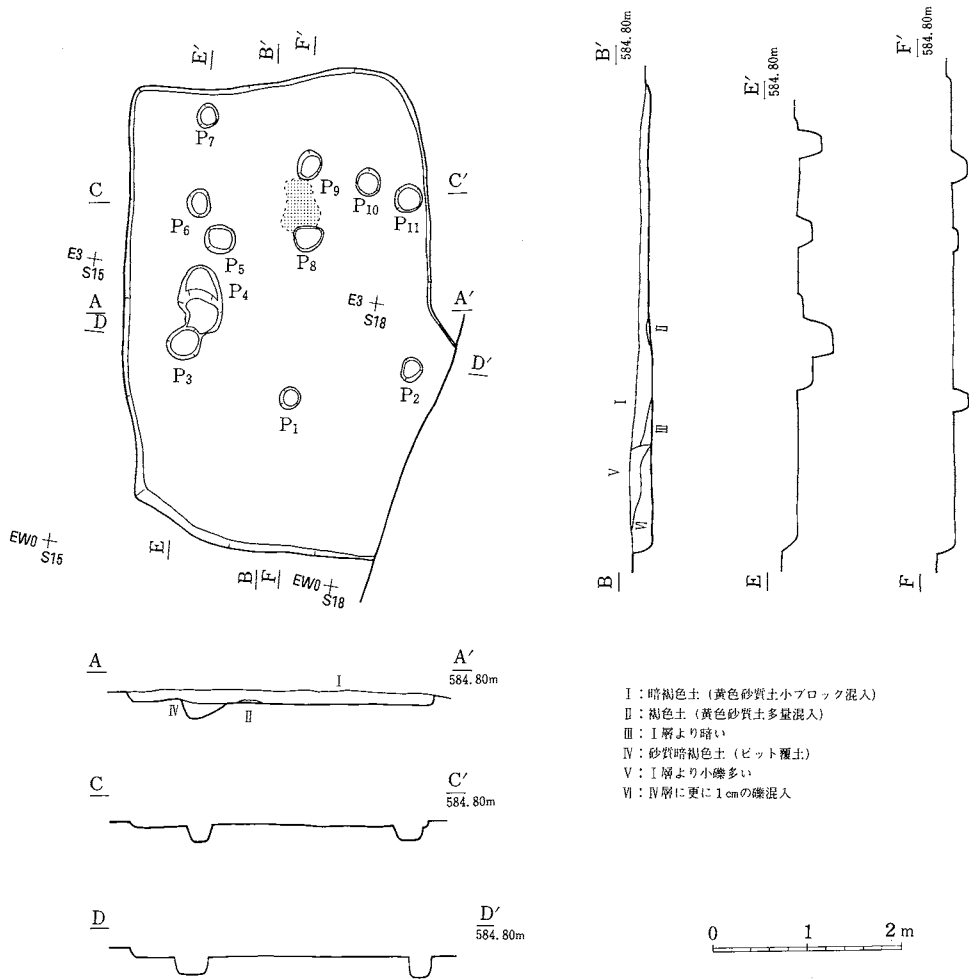
I : 暗褐色土 (焼土・黄色土粒混入)
 II : 暗褐色土
 III : 茶褐色土 (1~3cmの礫混入)
 IV : 茶褐色土



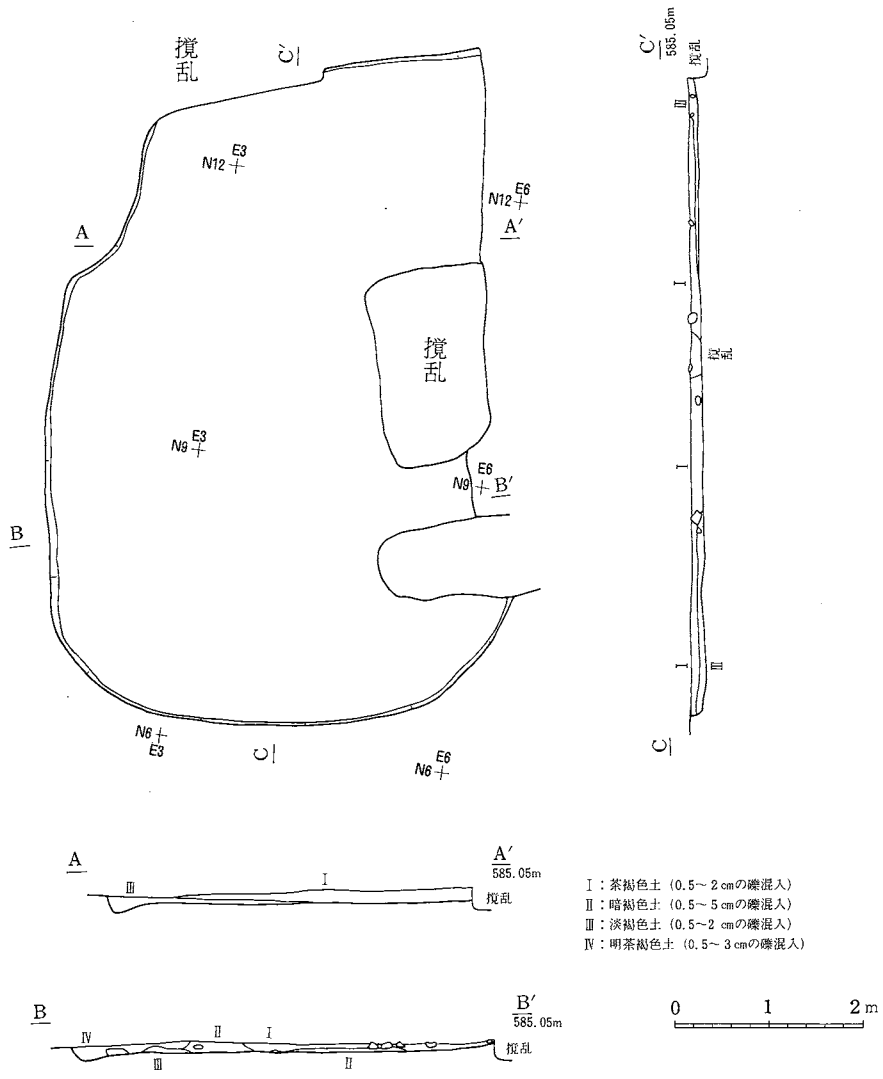
I : 褐色土 (0.5~1cmの礫少量混入)
 II : 黒褐色土 (砂核めて多量混入)



第12図 第76号住居址

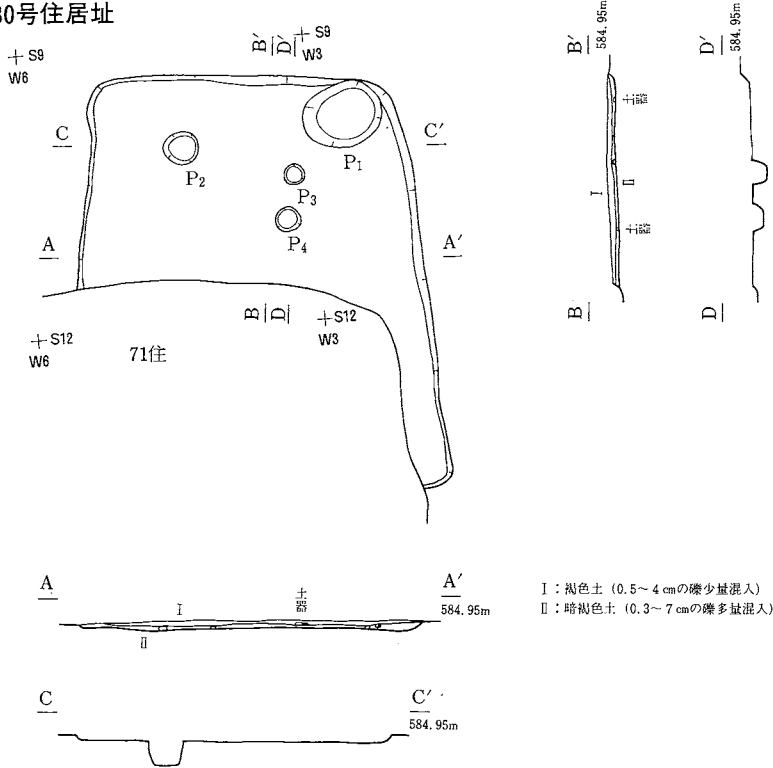


第13図 第77号住居址

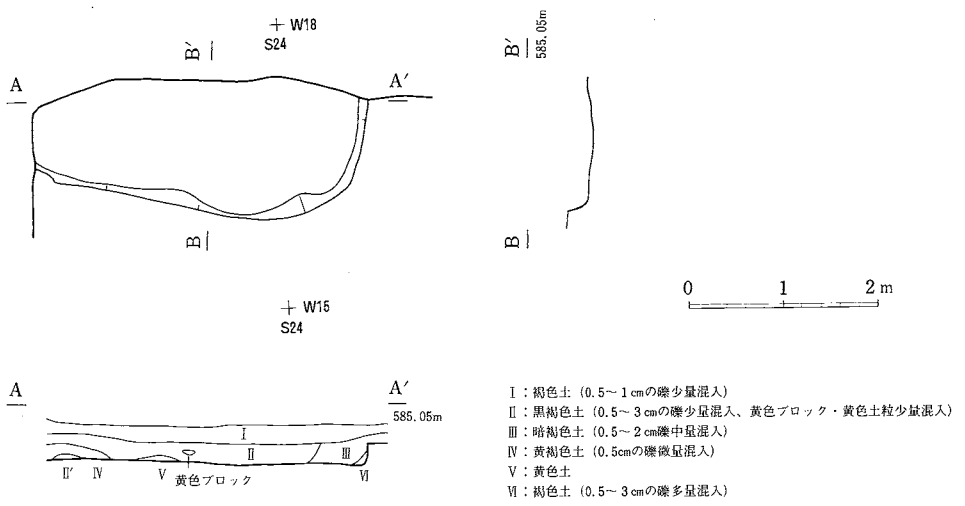


第14図 第79号住居址

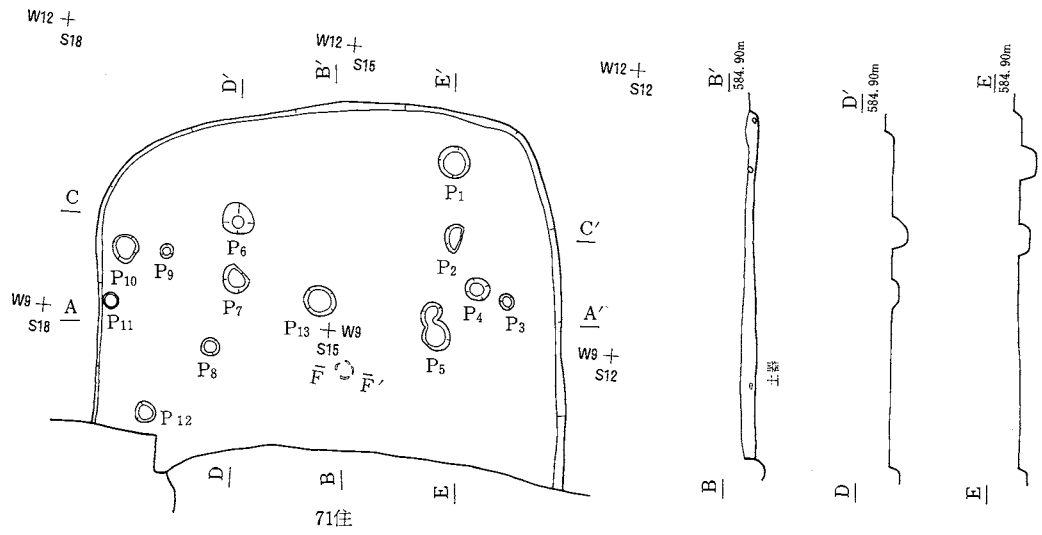
第80号住居址



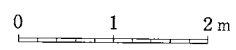
第84号住居址



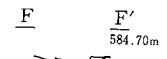
第15図 第80・84号住居址



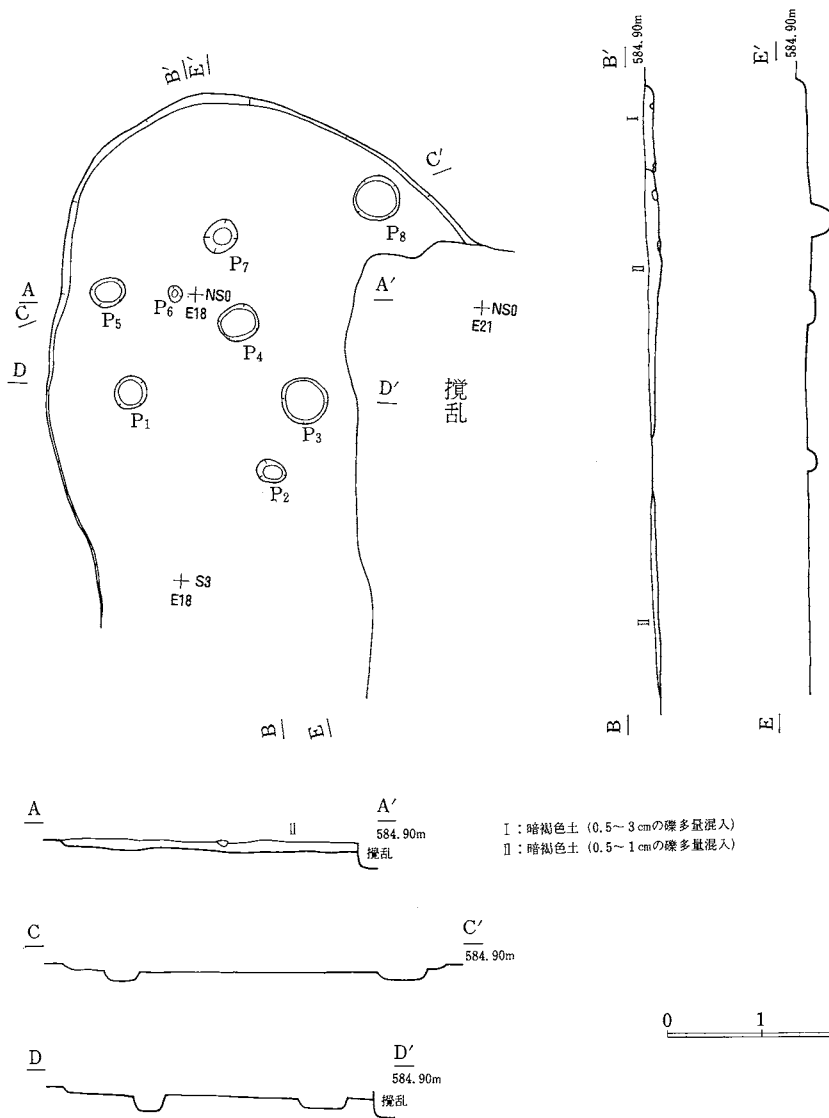
暗褐色土 (黄色粒・0.5~5cmの礫混入)、単層



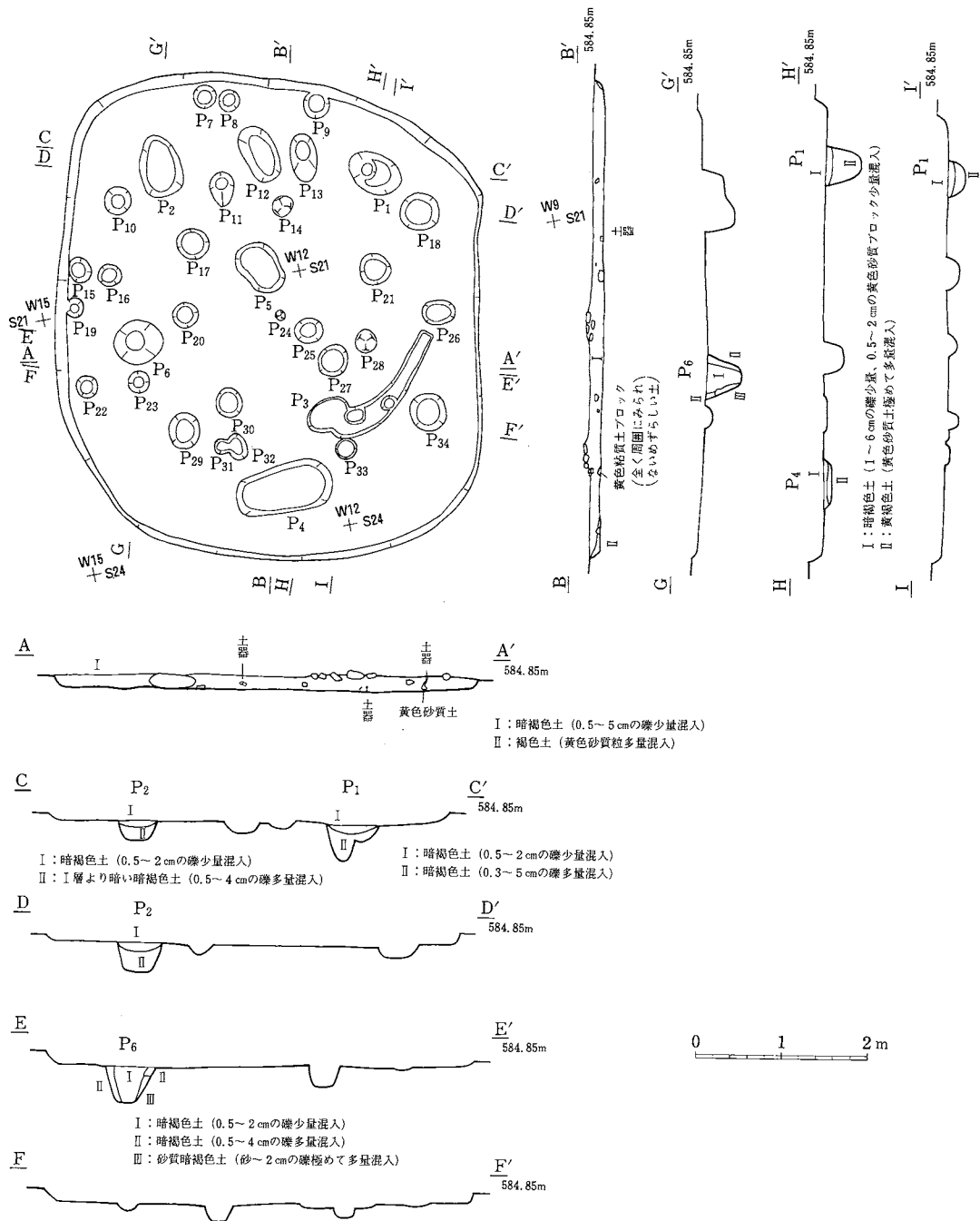
暗褐色土 (0.5~3cmの礫多量混入)



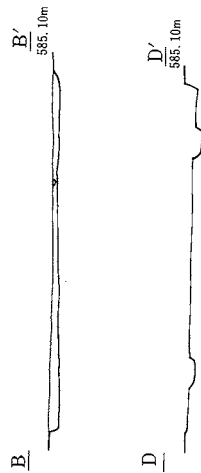
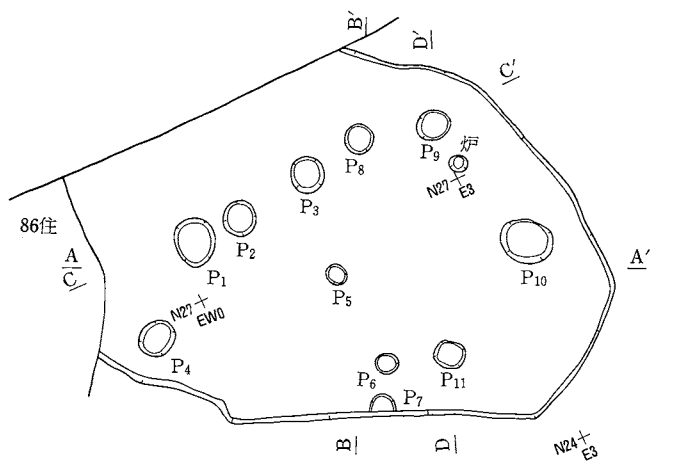
第16図 第81号住居址



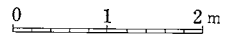
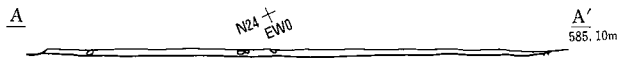
第17図 第82号住居址



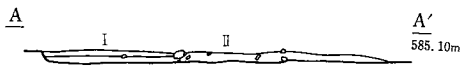
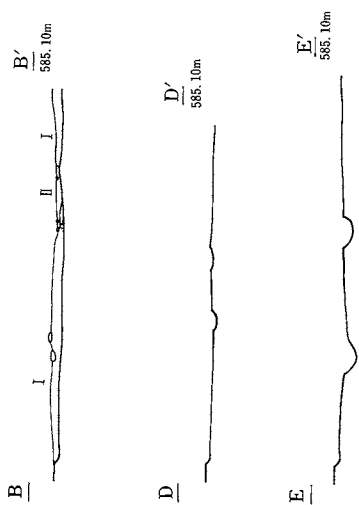
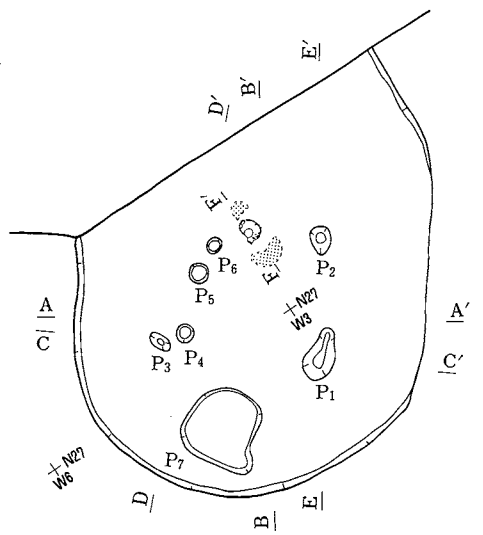
第18図 第83号住居址



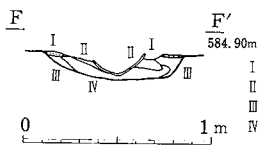
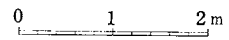
暗黒褐色土 (0.3~3cmの礫極めて多量混入)、単層



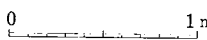
第19図 第85号住居址



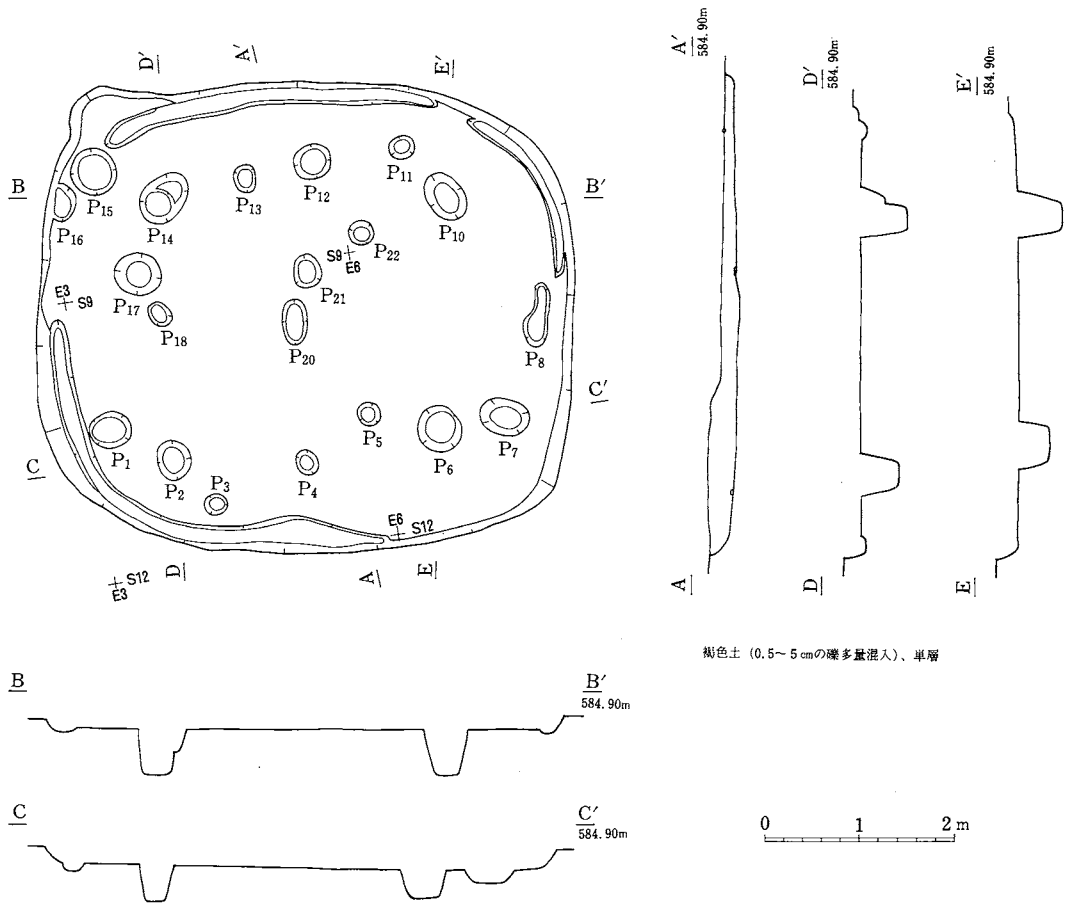
I : 暗褐色土 (0.5~3 cmの礫多量混入)
 II : 暗褐色土 (0.5~2 cmの黄色砂質土多量混入、炭化物微量混入)



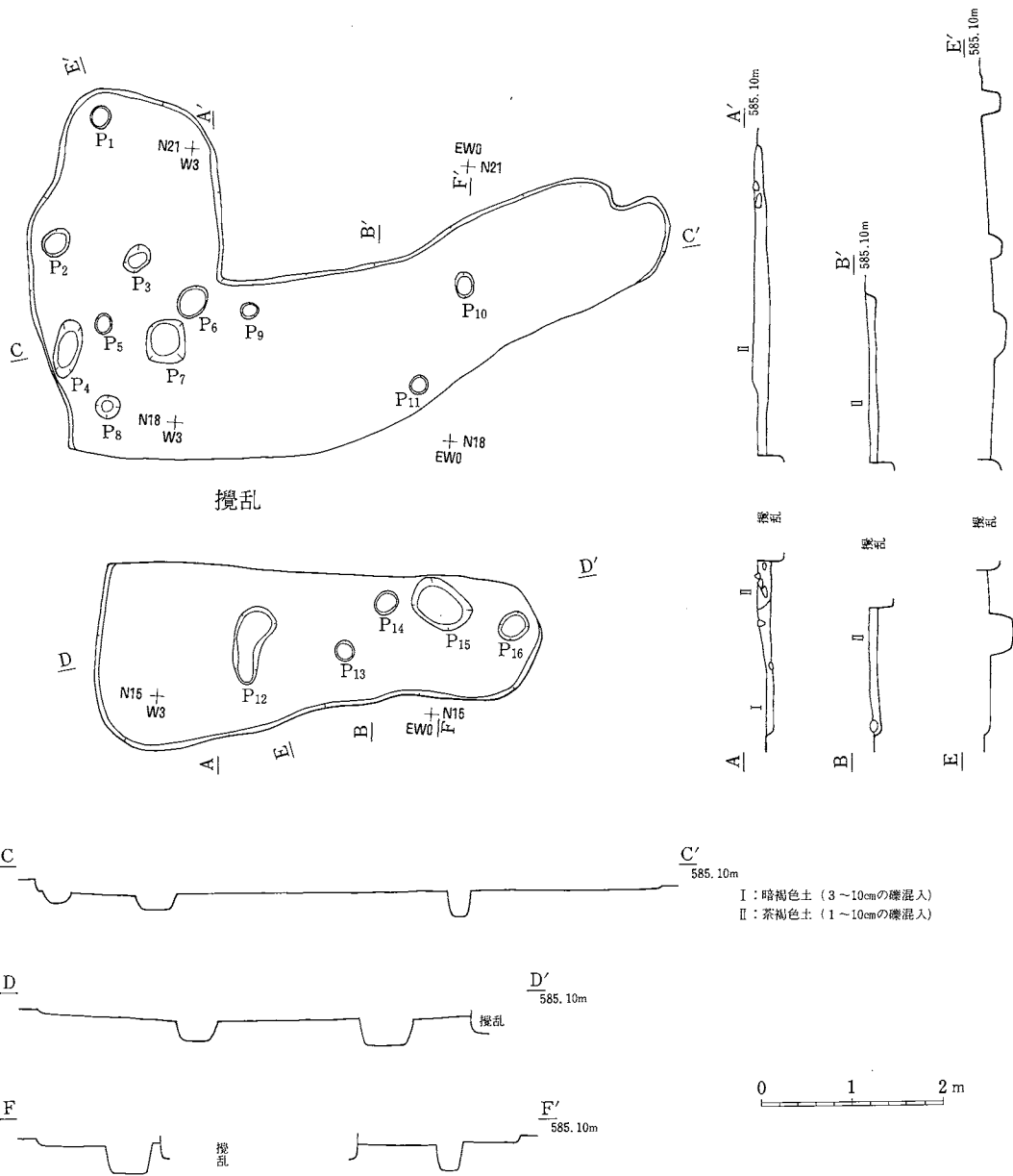
I : 焼土 (被燃層)
 II : 黄色砂質土少量混入暗褐色土 (炉の掘り方)
 III : 黄色砂質土
 IV : 暗褐色土 (0.5~2 cmの礫少量混入褐色土)



第20図 第86号住居址

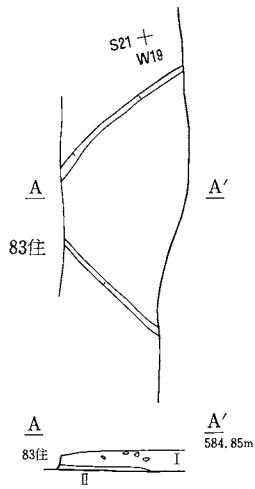


第21図 第87号住居址



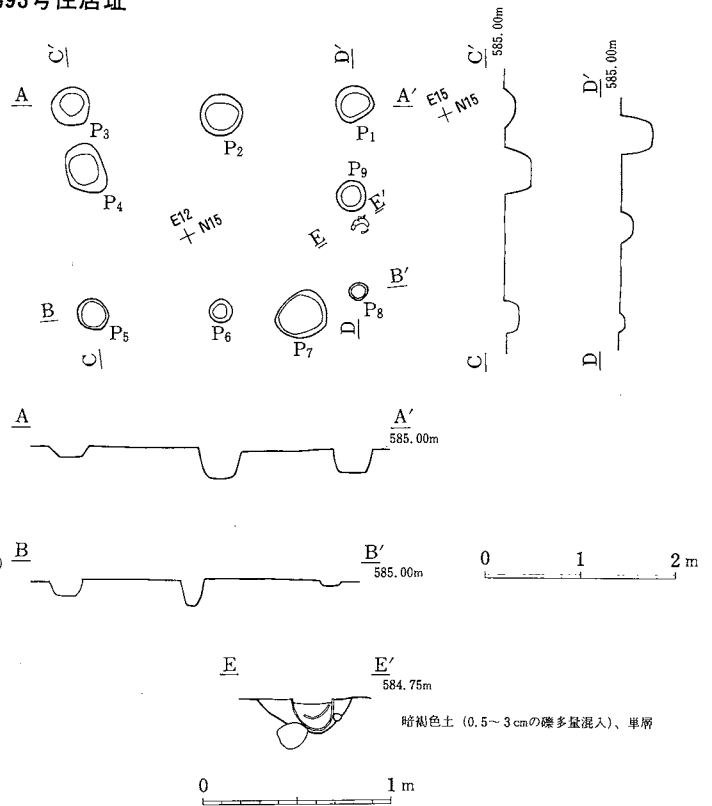
第22図 第89号住居址

第91号住居址



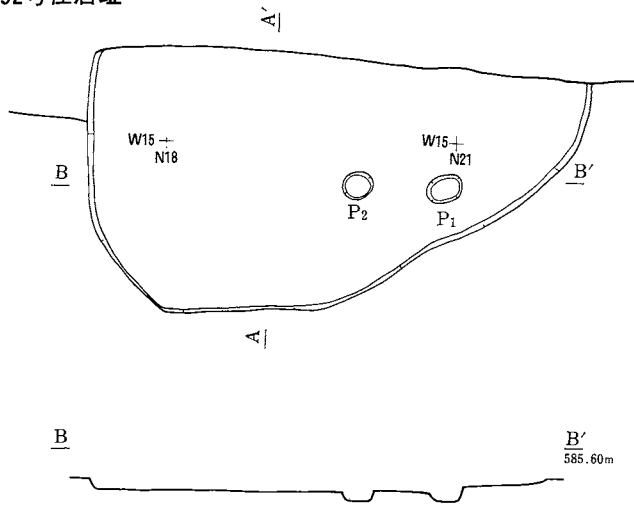
I：暗褐色土（黄色砂質フロック少量混入、炭化物微量混入）
 II：黄色砂質土

第93号住居址



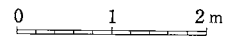
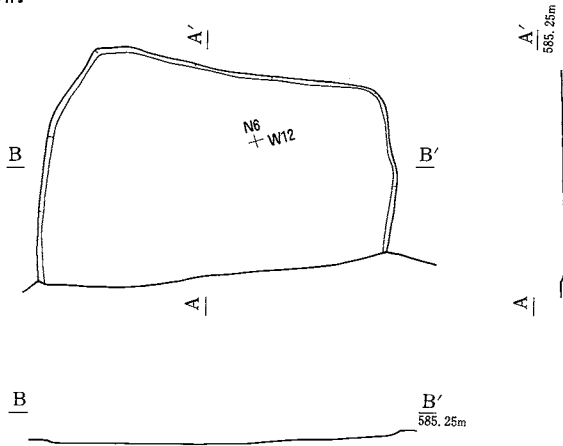
第23図 第91号住居址・第93号住居址

第92号住居址



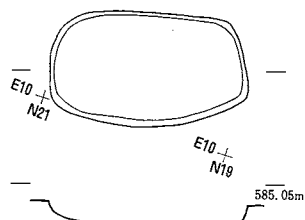
I : 暗褐色土 (0.5~3 cmの礫・炭化物少量混入)
 II : 褐色土 (0.5~3 cmの礫少量混入・炭化物微量混入)

竪穴状遺構

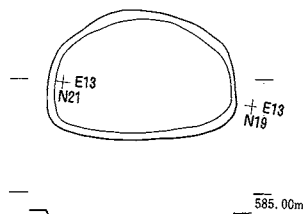


第24図 第92号住居址・竪穴状遺構

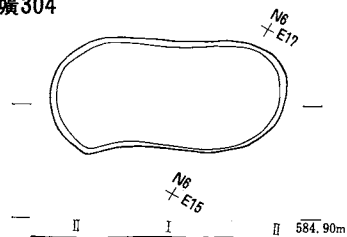
土壙301



土壙302

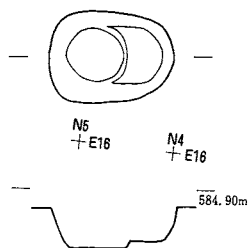


土壙304

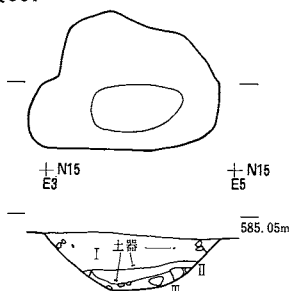


I : 黒褐色土 (0.5~5cmの礫極めて多量混入)
II : 暗褐色土 (0.5~1cmの礫少量混入)

土壙305

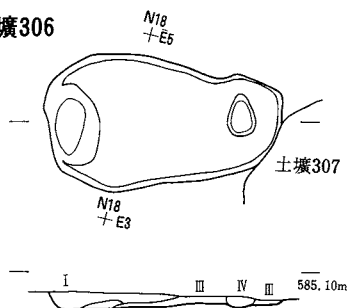


土壙307



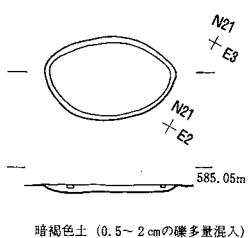
I : 暗褐色土 (0.3~7cmの礫多量混入)
II : 暗褐色土 (0.3~1cmの礫少量混入、I層より明るい)
III : 暗褐色土 (0.3~15cmの礫多量混入、II層と同じ)
IV : 褐色土 (0.3~1cmの礫少量混入)

土壙306



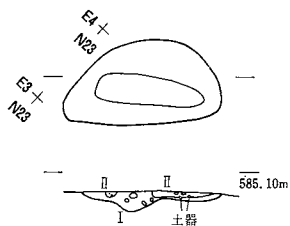
I : 暗褐色土 (0.5~3cmの礫多量混入)
II : 暗褐色土 (黄色砂粒少量混入)
III : 暗褐色土 (1~5cmの礫少量混入)
IV : 褐色土 (0.5cmの礫微量混入)

土壙308



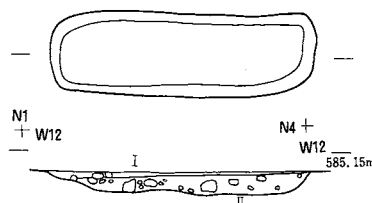
暗褐色土 (0.5~2cmの礫多量混入)

土壙309

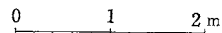


I : 暗褐色土 (0.3~3cmの礫多量混入)
II : 暗褐色土 (0.3~3cmの礫多量混入)

土壙310

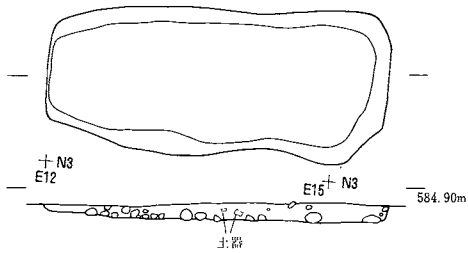


I : 褐色土 (0.5~3cmの礫多量、黄色砂粒多量混入)
II : 暗褐色土 (0.5~5cmの礫極めて多量混入)



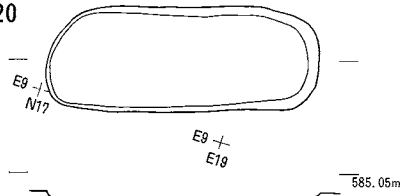
第25図 土壙(1)

土壙303

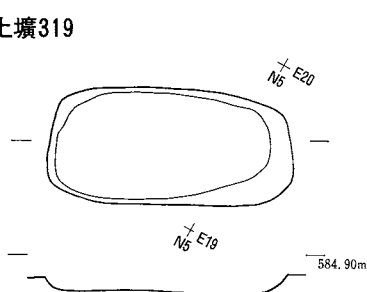


暗褐色土 (砂~10cmの礫極めて多量・炭化物微量混入)

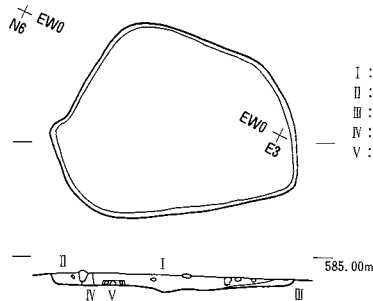
土壙320



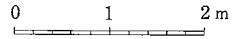
土壙319



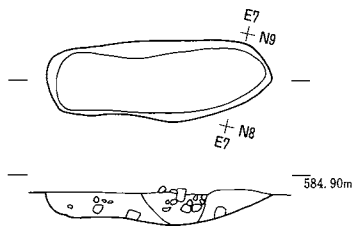
土壙315



- I : 暗褐色土 (0.5~5 cmの礫少量混入)
- II : 暗褐色土 (0.5~2 cmの礫多量混入、I層より明るい)
- III : 褐色土 (黄色砂質粒多量混入)
- IV : 砂質褐色土
- V : 黄色砂質土

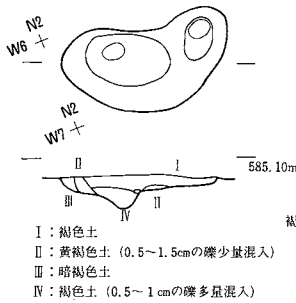


土壙311



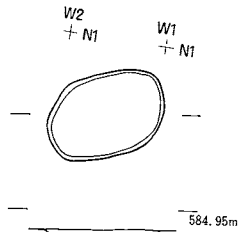
- I : 暗褐色土 (0.5~5 cmの礫極めて多量混入)
- II : 茶褐色土 (0.5~15cmの礫極めて多量混入、攪乱)

土壙313



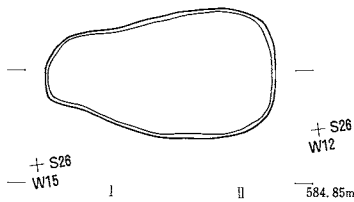
- I : 褐色土
- II : 黄褐色土 (0.5~1.5cmの礫少量混入)
- III : 暗褐色土
- IV : 褐色土 (0.5~1 cmの礫多量混入)

土壙317



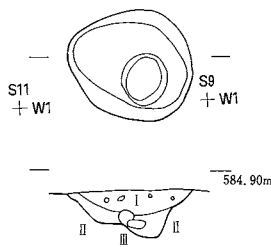
褐色土 (黄色砂質粒・0.5~5cmの黄色砂質ブロック多量混入)

土壙316



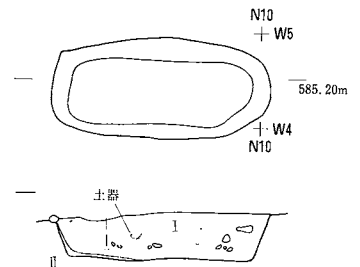
- I : 暗褐色土 (黄色砂質土少量混入)
- II : 褐色土
- III : 黄色砂質土

土壙312



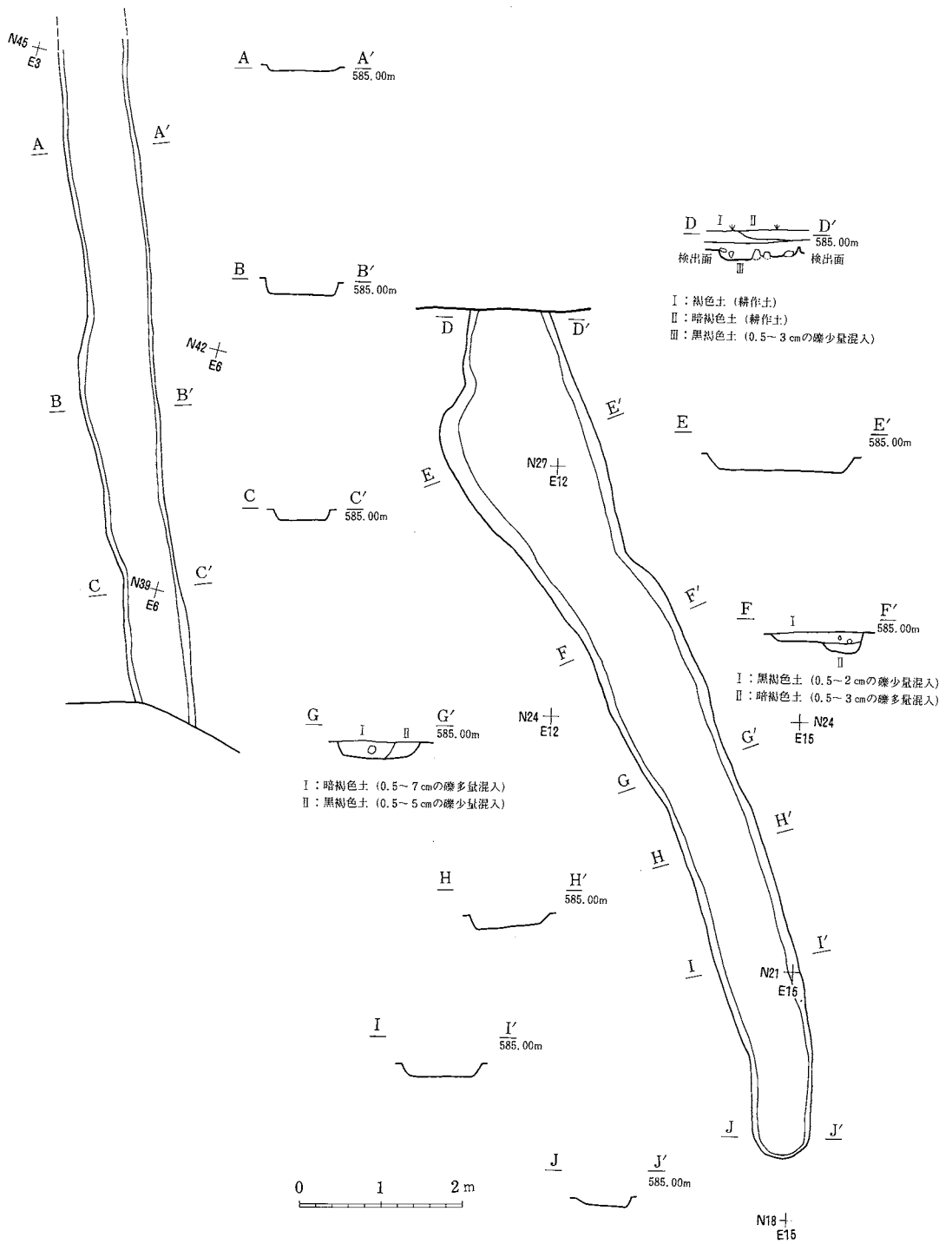
- I : 暗褐色土 (0.3~5 cmの礫多量混入)
- II : 暗褐色土 (0.3~6 cmの礫・黄色砂質粒多量混入)
- III : 黄色砂質土 (砂~3 cmの礫極めて多量混入)

土壙318

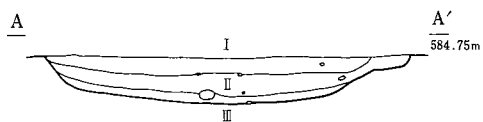
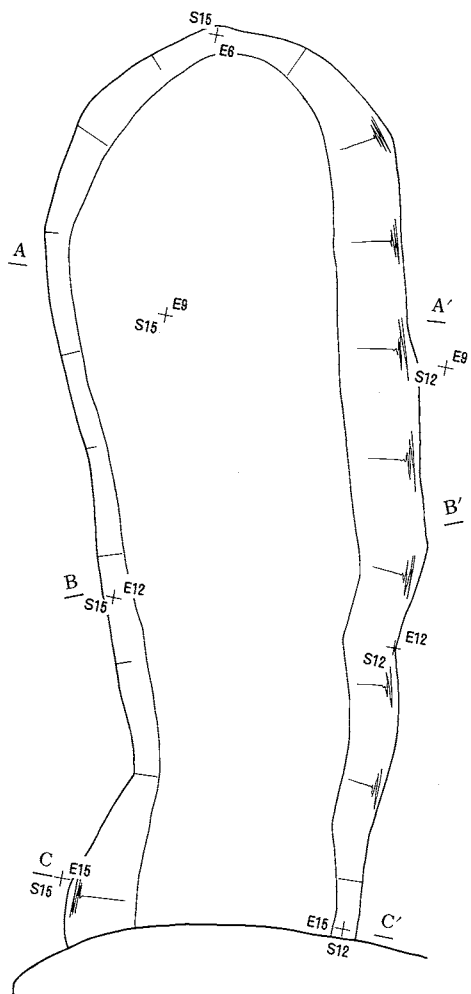


- I : 黒褐色土 (0.3~6 cmの礫極めて多量混入)
- II : 砂質褐色土

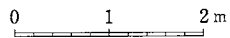
第26図 土壙(2)



第27図 溝址 1



- I : 暗褐色土 (0.5cmの礫微量混入)
- II : 黒褐色土 (1~3cmの礫少量混入)
- III : 褐色土 (0.5~3cmの礫少量混入、やや粘性あり)



第28図 溝址 2

第3章 調査のまとめ

今年度の発掘調査の終了により、宮淵本村の台地上の工事予定地はすべて調査のメスがはいったことになる。発掘調査の実質総面積は8,485㎡であった。今回を含め、3回にわたって遺構については報告をしてきたが、遺物は膨大な量で、いつ報告ができるか誠に不安である。とは言え総合的なまとめは遺物編の時にやることとして、ここでは前2回の結果も含めて今回調査の遺構と遺跡について触れてみたい。

1. 遺構について

今回は住居址25軒（弥生24，古墳1），竪穴状遺構1基，土壇21基，溝2本を発見した。

弥生時代 住居址は細かく見ると、弥生中期後半，同末，後期前半，の3時期にわかれるようであり，各時期の住居址の形態の特徴は前回の報告のまとめで触れたとおり，平面形は大枠では，隅丸方形（長方形）⇒楕円形⇒隅丸長方形（方形）と移り変わり，炉址の位置は，床面中央部⇒奥壁寄り柱穴間，と変化する（松本市教委1987『松本市宮淵本村遺跡Ⅱ』）。今回（第3次）でも各時期の典型的な住居址はいくつかあった。それは例えば中期後半の第76号住居址（隅丸方形，炉址中央埋壘炉），後期前半の第70号住居址（隅丸長方形，炉址柱穴間地床炉），等である。一方この枠に納まらない場合もあったが，たいていそれらは攪乱や耕作の影響でプランが乱れていたりしたのがほとんどで，特に今回はそれが多かった。ただし住居址の平面形よりは炉の位置の方が，より明瞭に時期差を示す傾向があることは注目に値しよう。住居址の細かい時期別の塗り分けは遺物整理の終了を待たなければ正確なものを示せないなのでここでは御容赦頂きたい。尚，本文中で触れられなかったが，第79号住居址の西隣に埋壘が1個，単独で現れ（図版19下段），削平されてしまった住居址の炉址と推定される。

弥生時代の遺構と見られる，墓址らしきもの（土壇303・311）の発見も珍しい。松本市内では方形周溝墓を除くと弥生時代の墓制は針塚遺跡の中期初頭の再葬墓になってしまい，中間の時期の様相がよくわかっていない。今後，他地域の類例を探ってこれが本当に墓址なのかどうかを検証していかなければならないが，もしそうであれば面白い事例であろう。

人骨を出土した一連の土壇（本文中では「第3の類型」の土壇とした）は，弥生時代のものと時期を確定できる材料がなくて残念だが，底面に小礫を敷いている点や，上部に大きな礫を置いて火を焚いているなど，異様の葬法がむしろ古さを物語っているような気がしてならない。台地の縁辺に沿って分布している点も見逃せない。これも各地の類例を調べて，時期を確定していく試みをしなくてはならない。

溝址1は時期の確定ができなかったが，土壇321に切られている点から弥生時代の可能性も充分あると考える。自然地形の台地の東縁辺に沿って走っているのは，同期の集落を囲むような性格の

ものであろうか。

古墳時代 住居址は今回は後期のものが1棟発見され、同期のものは計4棟になった。今回の例で極めて特徴的なことは深い住居址であったことで、他の弥生時代の住居が軒並み浅く上部を削平されてしまっているのに対し、実に60cmという壁高を有していた。基本的に両者の間には住居構造の根本的な違いがあるのではないかという思いを抱かせる光景であった。

墓址と見られる2基の土壙（土壙310・318）は、その一方から一括土器が出土してこの時期に属することが明らかになったのであるが、平面形が弥生時代に属すると推定している同種の土壙にも類似している点が気懸りである。もしかしたらこの種の土壙はすべてこの時期に下らせることになるのかもしれない。

3回の調査結果全体を通して見て、古墳後期の遺構は数が少なく分布もまばらで、しかも個々の遺構の規模が小さいことがわかる。分布の中心がもっと北～北西に偏っていて、中核的な大形の住居等もそちらにあると考えることもできるが、第1・2次調査で見た古墳中期の円墳の存在からして、まだ古墳後期には葬地としての意識が残っていて、規模の大きい集落が形成されることがなかったとも言えると思う。

2 遺跡について

今回の結果を合せ、弥生時代に関しては名実ともに松本平で最大の調査となった。特に松本市内では遺跡の立地・分布からみて、今後このクラスの該期遺跡の調査は当分の間、行われることはないであろう。

何故この弥生時代の大規模な集落がこの地に継続されたのか。いくつか理由を挙げてみたい。まず第1は他と画された台地上ということであろう。自然あるいは社会的な防壁となるからである。第2に台地の西の段下には奈良井川が流れ生活用水を得やすいということもあったであろう。第3に、これは最も重要なことであるが、生産地として台地東側に低湿地帯が続くことである。現在は篠ノ井線や国道19号線が走り面影はないが、かつての景観は本遺跡と城山、宮淵の丘陵地帯をわけものであったと想像され、ここそが本遺跡のみならず城山、宮淵方面の弥生時代遺跡の基盤でもあり、現松本市街北西部の弥生遺跡の集中をもたらした原因の一つであったと推定する。

第1～3次調査発見の遺構総数

種類	内 訳 ・ 時 期
住居址	89棟（弥生：84，古墳前期：1，古墳後期：4）
古墳	1基（古墳中期）
方形周溝墓	1基（古墳前期）
土壙	155基（弥生～古墳後期，ただし第1次調査では小規模なものもすべて土壙としたので数が多い）
溝址	6本（弥生？）
竪穴状遺構	2基（時期不明）
谷状地形	1か所（縄文？～弥生）

表1 住居址一覧表

住居 No	図 No	主 軸	平 面 形 態 規 模 (cm)	炉 址		所 属 時 期	備 考
				炉位置	炉 形 態・規 模		
67	4	N-8 ² -W	不整隅丸長方形 (500)×400以上	中央	(埋甕炉) 48×36以上	弥生中期 末	68住を切る
68	5	N-46 ² -E	隅丸長方形 800×(680)	なし		弥生中期 後半	67住に切られる
69	4	N-40 ² -W	不整隅丸長方形 340×320	南西壁中央	カマド	古墳後期	74住を切る
70	6	N-72 ² -E	長方形 800×560	不明	地床炉 ?	弥生後期 前半	76住を切る
71	7	N-4 ⁴ -E	隅丸長方形 580×580	柱穴間	地床炉 36×30	弥生後期 前半?	80・81住を切る
72	8	N-55 ² -W	隅丸長方形 500×400	なし		弥生中期 後半?	73住を切る
73	9	N-20 ² -W	隅丸長方形? (360以上)×?	なし		不 明	72住に切られる
74	10	N-12 ² -W	隅丸長方形 570×470	なし		弥生中期 末	69住, 土城313・317に切られる
75	11	N-2 ² -W	隅丸長方形 680×570	なし		弥生中期 後半	87住を貼る
76	12	N-80 ² -W	隅丸長方形? 480以上×450	中央奥より	埋甕炉 18×19	弥生中期 後半	70住に切られる
77	13	N-81 ² -E	長方形 500×(330)	中央奥より	地床炉 50×40	弥生中期?	
78	9	N-56 ² -W	楕円形?	不明	不 明	不 明	溝2に切られる
79	14	N-7 ² -W	隅丸長方形? 710×480以上	なし		不 明	土城311に切られる
80	15	N-5 ² -E	長方形 (430)×340	不明	不 明	弥生中期 後半	71住に切られる
81	16	N-96 ² -W	隅丸長方形? 490×400以上	中央	埋甕炉 20×20	弥生中期 後半	71住に切られる
82	17	N-28 ² -W	楕円形 500以上×480以上	なし		弥生中期 末?	
83	18	N-17 ² -E	隅丸長方形 560×490	なし		弥生中期 末	91住を切る
84	15	N-11 ² -E	長方形? ?	不明	不 明	弥生後期 前半	
85	19	N-88 ² -E	楕円形? (500)×390	柱穴間?	埋甕炉 20×20	弥生中期 後半~末	86住に切られる
86	20	N-35 ² -E	楕円形 480以上×380	中央	埋甕炉 22×20	弥生中期 末	85住を切る
87	21	N-11 ² -E	隅丸長方形 580×500	なし		弥生中期 後半	75住に貼られる
89	22	N-78 ² -E	隅丸長方形? 490以上×480	不明	不 明	不 明	北西隅, 他遺構と重複 前後関係不明
91	23	N-32 ² -W	不 明	不明	不 明	不 明	83住に切られる
92	24	N-31 ² -W	楕円形 350以上×300以上	不明	不 明	弥生中期 後半	
93	23	N-117 ² -E	不 明	柱穴間	埋甕炉 18×18	弥生後期 前半?	柱穴・炉のみの検出

表2 第1・2次調査住居址一覧表

住居 №	調査 年次	主 軸	平 面 形 態 規 模 (cm)	炉 址		所 属 時 期	備 考
				炉位置	炉 形 態・規 模		
1	I	N-82°-E	隅丸長方形 750×540	中央	緑石埋甕炉	中期後半	炉体土器(甕胴部)上端は床面より 5cm低い。
2	I	N-20°-E	楕円形 (500)×400	柱穴間	地床炉 88×68	後期前半	入口は北壁か? 1住を切る。
3	I	N-30°-W	隅丸方形 510×480			後期前半	床面中央にP1が存在。
4	I	N-90°-E	隅丸長方形 (600)×440	中央	埋甕炉	中期後半	炉体土器は蓋頸~胴部を逆位に埋設。
5	I	N-67°-E	楕円形 700×500	柱穴間	緑石地床炉 70×53	後期前半	15住を切る。
				柱穴間	地床炉 35×33		
6	I	N-77°-E	隅丸長方形 580×420	柱穴間	石囲炉 23×20	後期前半	
				柱穴間	埋甕炉		
7	I	N-66°-W	隅丸長方形 610×460			後期前半	
8	I	N-90°-E	隅丸方形 500×430			中期後半	
9	I	N-76°-E	隅丸長方形 (700)×480			後期?	
10	I	N-72°-E	楕円形 690×530			中期後半~ 後期前半	
11	I	N-18°-W	隅丸方形 600×(500)			中期後半	6住に切られる。
12	I	N-4°-W	隅丸方形 520×490	中央	地床炉 70×68	中期後半	8住を切る。
13	I	N-47°-E	不整楕円形 670×460			中期後半	
14	I	?	(楕円形) —			中期後半	P1は炉の可能性あり。
15	I	N-77°-E	(楕円形) (600)×?			中期後半	
16	I	N-1°-E	隅丸長方形 (570)×(400)			中期後半	4住に切られる。
17	I	N-18°-W	(隅丸方形) 500×(400)	柱穴間	埋甕炉	後期末	炉体土器は大形土器の底板を使用。
18	I	N-13°-W	楕円形 660×(470)			中期末	20住を切る。 溝1, 土壕25・102に切られる。
19	I	N-29°-W	(隅丸方形) 400×?	中央	埋甕炉	中期後半~ 中期末	炉体土器は甕体部。 21・22・23住を切る。
20	I	?	(楕円形) —			中期末	土壕25に切られる。
21	I II	N-83°-E	楕円形 660×(410)			中期末	22住, 溝7, 土壕245に切られる。 古墳墳丘下にある。
22	I II	N-75°-E	楕円形			後期	21住を切る。古墳主体部に切られる。 古墳墳丘下に存在。
23	I						未掘 21住を切る。
24	I	N-84°-E	楕円形 630×490			中期後半	土壕26・27と切合い。
25	I	N-35°-W	楕円形 (540)×(460)			後期前半	24・27住を切る。
26	I	N-82°-E	長楕円形 730×420	柱穴間	埋甕炉	中期末	甕下半部使用。
27	I	?	(楕円形) —			(中期後半) (~後期?)	
28	I	N-73°-W	隅丸方形 560×(500)			中期後半	P2は炉の可能性あり。

住居 №	調査 年次	主 軸	平 面 形 態 規 模 (cm)	炉 址		所 属 時 期	備 考
				炉位置	炉 形 態・規 模		
29	I	N-43°-E	長楕円形 —	柱穴間?	埋甕炉	後期	30住を切る。
30	I	N-88°-E	(隅丸方形) 450×?			中期末	
31	I	N-6°-W	楕円形 640×470	柱穴間	埋甕炉	中期末	
32	I	N-87°-E	楕円形 570×(450)			中期後半	28住を切るか?土壇55を切る。 集石3に切られる。
33	I	N-86°-E	長楕円形 490×(340)			中期末	
35	I	?	(隅丸長方形) —			(中期後半) ~中期末	床面の一部のみ確認。
36	I II	N-25°-W	隅丸長方形 500×370	中央	緑石埋甕炉	中期後半	炉体土器は壺底部 55住に貼られる。
37	I	N-80°-E	隅丸方形 440×430		東壁中央にカマド	古墳前期	東壁外70cmに煙出しあり。
38	I	N-7°-W	長楕円形 840×530			中期後半	土壇73に切られる。
39	I II	N-80°-E	楕円形 700×620			中期末~ 後期前半	床2段。 土壇69・72・74に切られる。
40	I II	N-0°	隅丸方形 490×470		北壁にカマド	古墳後期	46住を切る。
41	I	N-13°-E	(隅丸長方形) (300)×(250)			中期末	
42	I	N-80°-E	隅丸長方形 590×(450)			(中期末~) 後期前半	
43	I	?	(楕円形) —			(中期末)	床部の一部のみ確認。
44	I	?	(隅丸方形) —			(中期末~) 後期前半	床面の一部のみ確認。
45	II	N-15°-E	楕円形 580×(250以上)			中期後半	東半を削平。
46	II	N-10°-E	長方形 ?			不明	
47	II	N-55°-W	隅丸方形 480×(480)		東壁にカマド	古墳後期	48住を切る。
48	II	N-75°-W	楕円形 540×(450)	中央	地床炉 50×35	中期後半	土壇202に貼られる。土壇208に切られる。 47住に切られる。
49	II						
50	II	S-70°-W	隅丸長方形 (350以上)×400	柱穴間	埋甕炉	後期	東半削平。 炉は壺口縁~頸部を埋める。
51	II	N-75°-W	楕円形 720×510			中期末	土壇201・227に切られる。 ほとんど削平。
52	II	N-80°-E	楕円形? (350以上)×440			後期	方形周溝墓に切られる。 東半削平。
53	II	N-85°-W	隅丸長方形 560×460	(柱穴間)	地床炉 40×35	後期	方形周溝墓に北東部を破壊される。
54	II	N-15°-E	隅丸長方形 390×(180以上)			中期後半	
55	II	N-55°-E	楕円形 520×(600以上)			中期末	36住を貼る。 覆土中に集石。
56	II	N-55°-E	隅丸長方形 600×?			不明	南半分削平。
57	II	N-55°-W	楕円形 730×(400)	柱穴間	地床炉 105×55	後期前半	66住を貼る。古墳周溝に切られる。 墳丘下に周溝あり。

住居 No	調査 年次	主 軸	平 面 形 態 規 模 (cm)	炉 址		所 属 時 期	備 考
				炉位置	炉 形 態・規 模		
58	II	N-50°-W	長方形 (400以上)×?	(柱穴間)	地床炉 40×40	後期	古墳周溝に切られる。 南西側壁下に段あり。
59	II	N-10°-E	楕円形? (110以上)×280			中期後半	土壇234に切られる。 古墳周溝に上部を破壊される。
60	II	N-65°-W	楕円形 (600以上)			中期後半	方形周溝墓、土壇243、古墳周溝に切られる。 東部は削平。
61	II	S-80°-W	楕円形 (950)×600	柱穴間	縁石地床炉 45×45	後期	62住を切る。方形周溝墓に上部を破壊される。 土壇233を切る。
62	II					縄文中期	西側一部分のみ残存。 61住に切られる。
63	II			不明	地床炉 (40以上)×35	不明	59住に切られる。 古墳周溝に床まで破壊される。
64	II		楕円形			後期	土壇240・241・236に切られる。 古墳主体部に切られる。57住を切る。
65	II			不明	炉址のみ 埋竈炉	中期末	竈胴部上半以下正位に埋納。
66	II	N-80°-W	隅丸長方形 (550以上)×(250以上)			中期後半	57住に貼られる。古墳周溝に切れ、床面 下に周溝あり。

表 3 土壇一覽表

No	図	位 置	平面形	断面形	平面規模 (cm)	深さ (cm)	備 考
301	25	N 21 E 10	不整形	台形	208×122	20	人骨
302	25	N 21 E 13	〃	〃	200×136	15	人骨
303	26	N 3 E 15	〃	〃	360×182	15	
304	25	N 6 E 17	不整楕円形	〃	246×116	10	人骨
305	25	N 5 E 16	〃	台形二段底	130×96	35	
306	25	N 18 E 3	〃	台形	254×146	10	
307	25	N 15 E 3	〃	皿形	200×144	55	
308	25	N 21 E 2	楕円形	台形	132×86	5	
309	25	N 23 E 4	不整楕円形	皿形	166×88	10	中央に窪みあり
310	25	N 4 W 12	方形	台形	280×96	20	
311	26	N 9 E 7	不整楕円形	皿形	238×86	35	
312	26	S 9 W 1	円形	台形二段底	136×116	40	
313	26	N 2 W 7	不整形	皿形	182×90	15	中央に窪みあり
315	26	N 3 E W 0	〃	台形	260×204	10	
316	26	S 26 W 15	〃	〃	244×136	10	
317	26	N 1 W 1	楕円形	皿形	130×90	10	
318	26	N 10 W 4	不整形	台形	230×108	50	
319	26	N 5 E 19	不整楕円形	〃	260×124	20	人骨
320	26	N 17 E 9	〃	〃	288×112	10	人骨
321		N 27 E 12	楕円形	〃			溝1張り出しと誤認、人骨

版 图



図版1 調査地全景



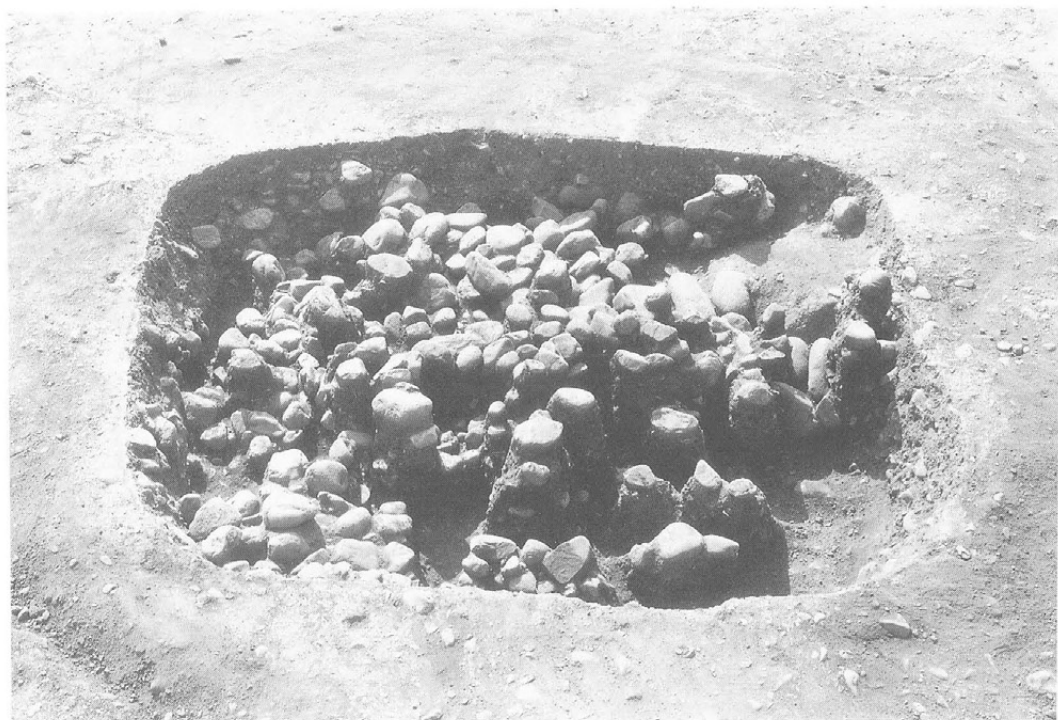
第67号住居址



第68号住居址



第69号住居址



第69号住居址礫出土状態



第70号住居址



第70号住居址遺物出土狀態



第71号住居址



第72号住居址



第73号住居址



第74号住居址



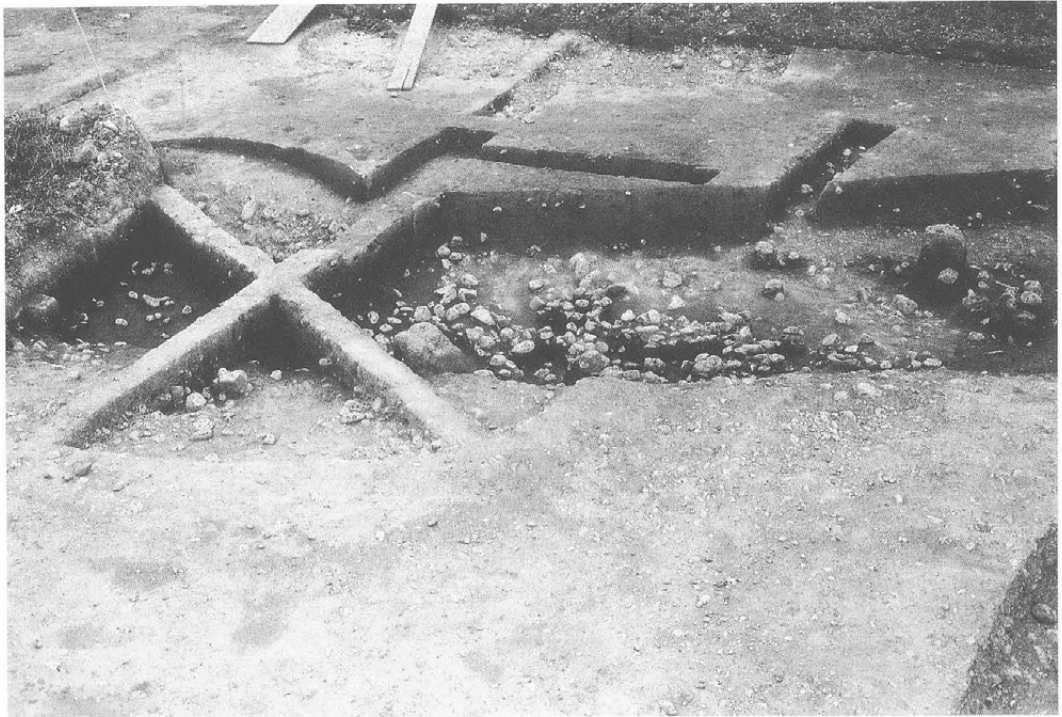
第75号住居址



第76号住居址



第77号住居址



第78号住居址、溝址 2



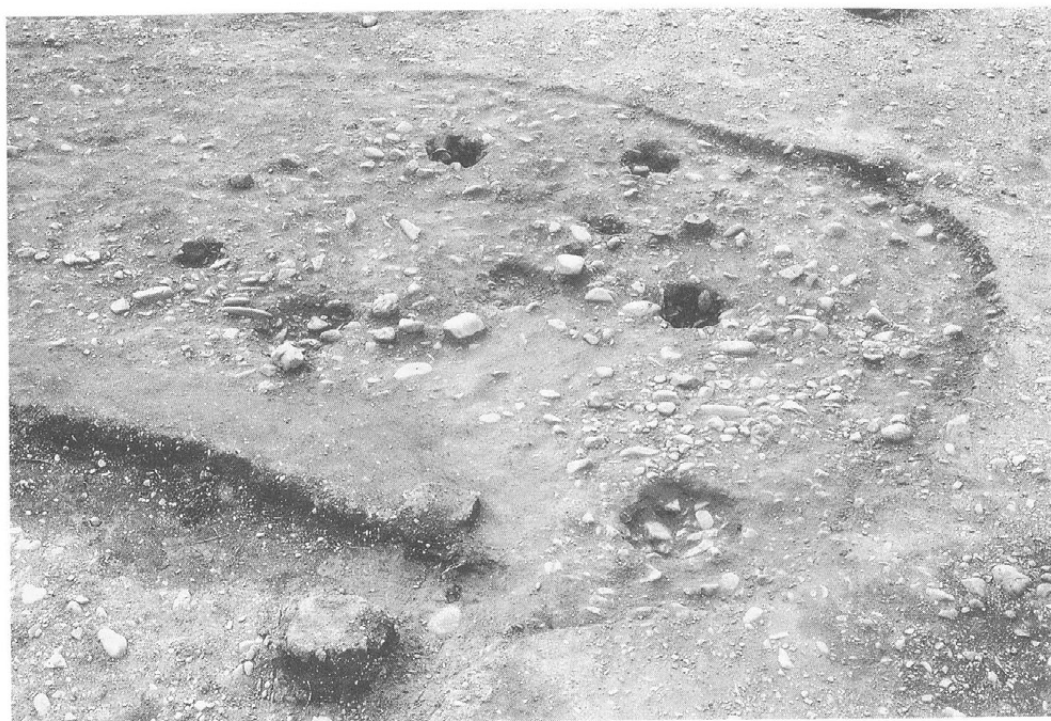
第79号住居址



第80号住居址



第81号住居址



第82号住居址



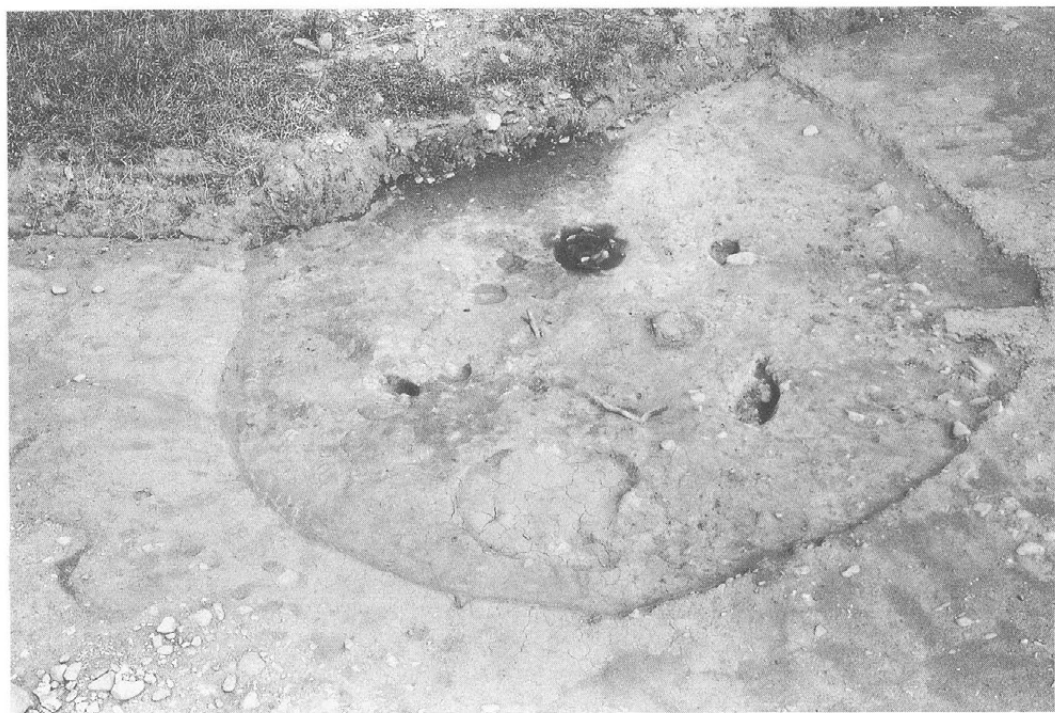
第83号住居址



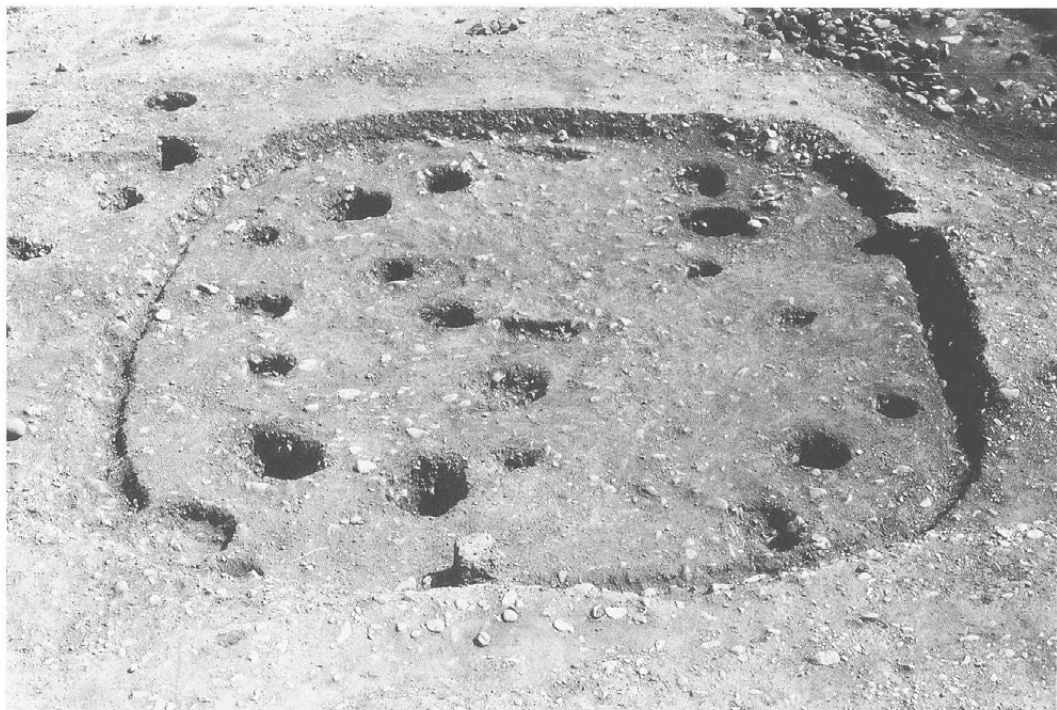
第84号住居址



第85号住居址



第86号住居址



第87号住居址



第89号住居址



第92号住居址



溝址 2



土壙301



土壙302



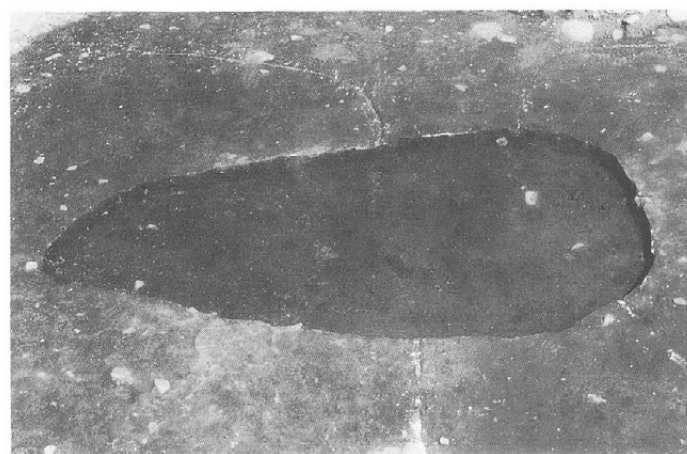
土壙303



土壙310



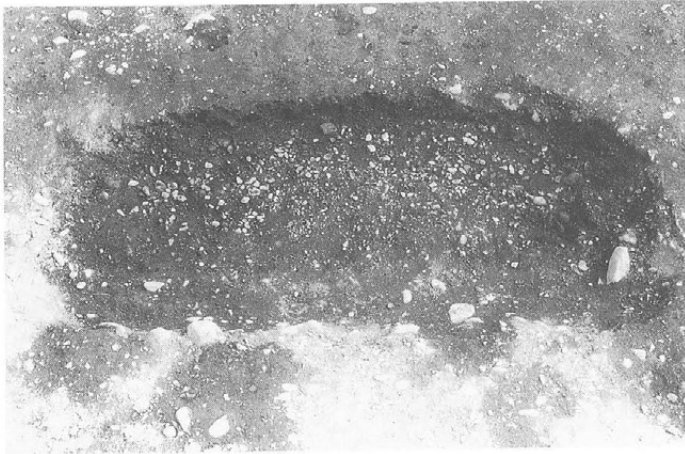
土壙311



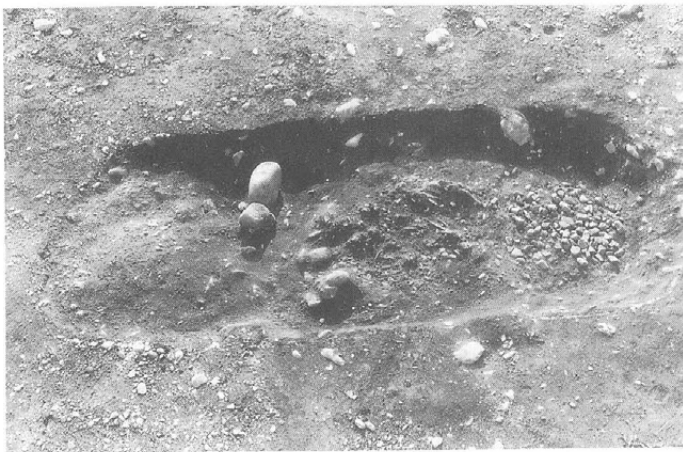
土壙316



土壤318



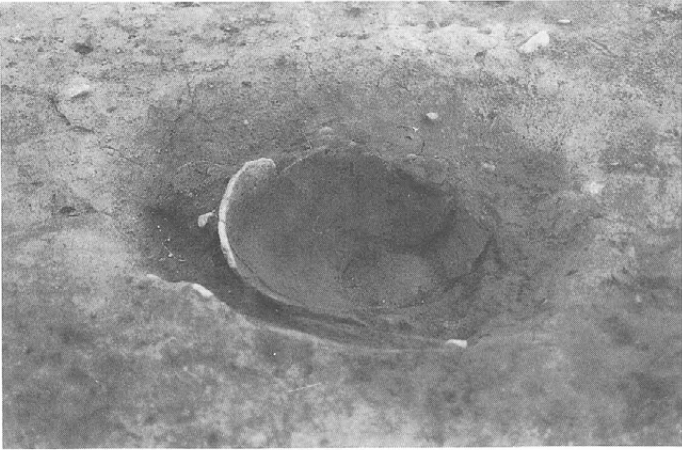
土壤319



土壤320



第76号住居址
埋甕炉



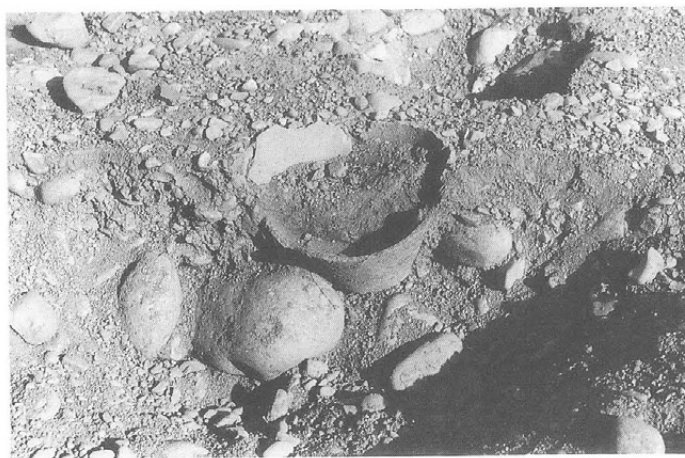
第86号住居址
埋甕炉



同上側面



第81号住居址
埋甕炉



第93号住居址
埋甕炉



調査区中央西
单独埋甕



遺構検出



測量



遺構検出



住居址掘り下げ



土壌人骨
取り上げ



雷雨

松本市文化財調査報告No.77

松本市宮渕本村遺跡Ⅲ

平成元年3月20日 印刷

平成元年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 中信凸版印刷株式会社



付図 宮沢本村遺跡 昭和60・61・63年度発掘調査

数字は住居地番号

